



墳古山寺宮神  
墳古山白茶浜網

2007

岡山市教育委員会

神宮寺山古墳  
網浜茶白山古墳

2007

岡山市教育委員会

## 序

私どもの岡山市は、北は吉備高原の一角をなす山々、南は島々の連なる瀬戸内海を擁し、温暖な気候、旭川、吉井川の豊富な水に恵まれ、古くから吉備の国の政治的、経済的な中心として発達して参りました。特に、岡山城の築城とその城下町の整備以降、山陽道有数の都市として発展を遂げております。一方で、都市化の波の中、こうした発展の証人でもある遺跡の保護も大きな課題となっております。

このたび報告します、神宮寺山古墳、網浜茶臼山古墳の二基の古墳は、岡山市街地のほど近くに所在する大型の前方後円墳です。ともにごく小規模な試掘調査や立会調査ではありますが、調査から十年以上が経過してのようやくの報告となったこと、まずはお詫び申し上げます。

神宮寺山古墳は沖積地に立地する希有な古墳として国の史跡に指定されています。この調査で本来の墳丘は史跡指定範囲の外側に広がっており、なおかつ墳丘端部の構造が埋没して残っている可能性の高いことがわかりました。しかしながら、周囲は学校や宅地がせまり、さらなる追求をすることは非常に困難な状況ではありますが、史跡の保護と活用も含め大きな課題となっております。

網浜茶臼山古墳は、特殊器台形埴輪と呼ばれる最古の埴輪を伴う古墳ですが、江戸時代以来の墓地造成によって、ほとんど原形をとどめておりません。調査は墓地改葬に伴う立会調査のため、十分な対応を行うことはできませんでしたが、特殊器台形埴輪などを採集しております。

これらの古墳は調査においても保護や活用においても大きな問題を抱える古墳であり、このたびの調査で得られた情報もわずかなものではありますが、この報告が、両古墳の理解に少しでも役立つのであれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に際しては主幹課である環境衛生課をはじめ、施工業者の方々にご協力賜りましたこと、篤くお礼申し上げます。

平成19年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 山根 文男

## 例 言

1. この報告書は、岡山市教育委員会文化課が実施した次の調査の報告書である。
  - ・岡山市立御野小学校汚水処理槽設置等に伴う岡山市中井町一丁目地内、神宮寺山古墳の試掘調査（昭和58年）
  - ・無縁墓改葬事業に伴う岡山市赤坂南新町地内、網浜茶白山古墳の立会調査（平成5年度）
2. この報告書の作成は岡山市教育委員会が実施し、執筆は第Ⅱ章2を神谷正義、ほかを安川 満が担当した。
3. 遺物の実測、トレース、遺物の写真撮影、編集は神谷と安川が行った。
4. この報告書において用いている高度値は標高（東京湾の平均海水面、TP）である。
5. この報告書において用いている方位は磁北である。
6. この報告書において、古墳時代の時代区分は10期編年（広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国）を用いる。
7. 第2図、第4図、第11図は国土交通省国土地理院発行の25,000分の1地形図「岡山南部」、第5図、第12図は岡山市発行の2,500分の1岡山市域図7-14、8-6、8-10を複製、加筆したものである。
8. 出土遺物の色調記載については、標準土色帳に拠った。なお、土層等の色調表現については、できるかぎり、土色帳の表現に近いものに改めている。
9. この報告書で報告した遺物、実測図、写真等は岡山市教育委員会で保管している。

# 目次

## 第Ⅰ章 位置と環境

- 1 旭川下流域平野の地理的環境…………… 1
  - a. 児島湾と旭川下流域平野の発達/b. 旭川下流域平野の微地形
- 2 旭川下流域平野の歴史的環境…………… 4
  - a. 縄文時代以前/b. 弥生時代/c. 古墳時代/d. 古代以降

## 第Ⅱ章 神宮寺山古墳

- 1 神宮寺山古墳の位置と周辺…………… 9
  - 1) 神宮寺山古墳の概要…………… 9
  - 2) 神宮寺山古墳の位置と周辺の遺跡…………… 10
- 2 調査の経過と概要…………… 13
  - 1) 経緯…………… 13
  - 2) 調査の概要…………… 14
    - a. 試掘坑Ⅰ/b. 試掘坑Ⅱ/c. 試掘坑Ⅲ/d. 試掘坑Ⅳ
  - 3) 小結…………… 19
- 3 出土遺物…………… 21
  - 1) 出土遺物とその特徴…………… 21
  - 2) 小結…………… 21

## 第Ⅲ章 網浜茶臼山古墳

- 1 網浜茶臼山古墳の位置と周辺…………… 24
- 2 調査の経過と概要…………… 28
  - 1) 調査の経緯と経過…………… 28
    - a. 調査の経緯/b. 調査の方法と経過
  - 2) 調査の概要…………… 28
    - a. 墳丘各部の概要/b. 近世～現代墓
- 3 出土遺物…………… 32
  - 1) 出土埴輪…………… 32
    - a. 特殊器台形埴輪/b. 特殊壺形埴輪/c. 胎土
  - 2) 石槨石材…………… 36
  - 3) 小結…………… 36
    - a. 文様帯文様の復元/b. 調整等の特徴

## 第Ⅳ章 まとめ

- 1 網浜茶臼山古墳出土埴輪の位置付け…………… 38
- 2 神宮寺山古墳墳端部の構造について…………… 42

## 挿図一覧

第1図	岡山市と旭川下流域平野の位置	1
第2図	旭川下流域平野の主要な遺跡 (1/50,000)	3
第3図	神宮寺山古墳断面・平面図	9
第4図	神宮寺山古墳と周辺の遺跡 (1/25,000)	11
第5図	神宮寺山古墳とその周辺 (1/2,500)	13
第6図	試掘坑の配置 (1/2,000)	14
第7図	試掘坑Ⅰ平面図・土層断面図 (北壁) (1/20)	15・16
第8図	試掘坑Ⅱ土層断面図 (北壁) (1/40)	18
第9図	試掘坑Ⅲ土層柱状図 (1/40)	19
第10図	神宮寺山古墳出土埴輪 (1/3)	22
第11図	網浜茶臼山古墳と周辺の遺跡 (1/25,000)	24
第12図	網浜茶臼山古墳と操山109号墳 (1/2,500)	25
第13図	操山109号墳墳丘測量図 (1/800)	26
第14図	操山109号墳 (前方部から)	26
第15図	網浜茶臼山古墳墳丘と立会調査対象の改葬墓	29
第16図	後円部東斜面近代墓外観	30
第17図	後円部東斜面近代墓模式図	30
第18図	前方部南斜面近世墓模式図	31
第19図	埴輪各部と文様の呼称	32
第20図	網浜茶臼山古墳出土埴輪 (1/3)	33
第21図	石槨石材 (1/3)	35
第22図	網浜茶臼山古墳埴輪の文様の復元	36
第23図	操山109号墳出土埴輪	39
第24図	試掘坑Ⅰ墳端列石 (上) と大型石材の分布 (下) (1/40)	42

## 表一覧

表1	神宮寺山古墳出土埴輪観察表	23
表2	網浜茶臼山古墳出土埴輪観察表	34

## 図版一覧

- 図版 1 神宮寺山古墳全景  
調査地点の現況（平成18年現在）  
試掘調査の状況（全景）
- 図版 2 試掘抗 I 試掘調査の状況  
試掘抗 I 葺石検出状況（西側から）  
試掘抗 I 葺石検出状況（東側から）
- 図版 3 試掘抗 I 墳端部の状況  
試掘抗 I 墳丘側盛土の状況  
試掘抗 II 西端部の土層堆積状況
- 図版 4 試掘抗 II 東端部の土層堆積状況  
試掘抗 III 土層堆積状況  
試掘抗 IV 土層堆積状況
- 図版 5 神宮寺山古墳出土埴輪（外面）  
神宮寺山古墳出土埴輪（内面）
- 図版 6 網浜茶臼山古墳全景（南東側から）  
改葬事業実施状況（前方部墳頂）  
石槨石材の検出状況（後円部墳頂）
- 図版 7 網浜茶臼山古墳出土埴輪（前方部墳頂出土・外面）  
網浜茶臼山古墳出土埴輪（前方部墳頂出土・内面）
- 図版 8 網浜茶臼山古墳出土埴輪（くびれ部等出土・外面）  
網浜茶臼山古墳出土埴輪（くびれ部等出土・内面）  
網浜茶臼山古墳石槨石材

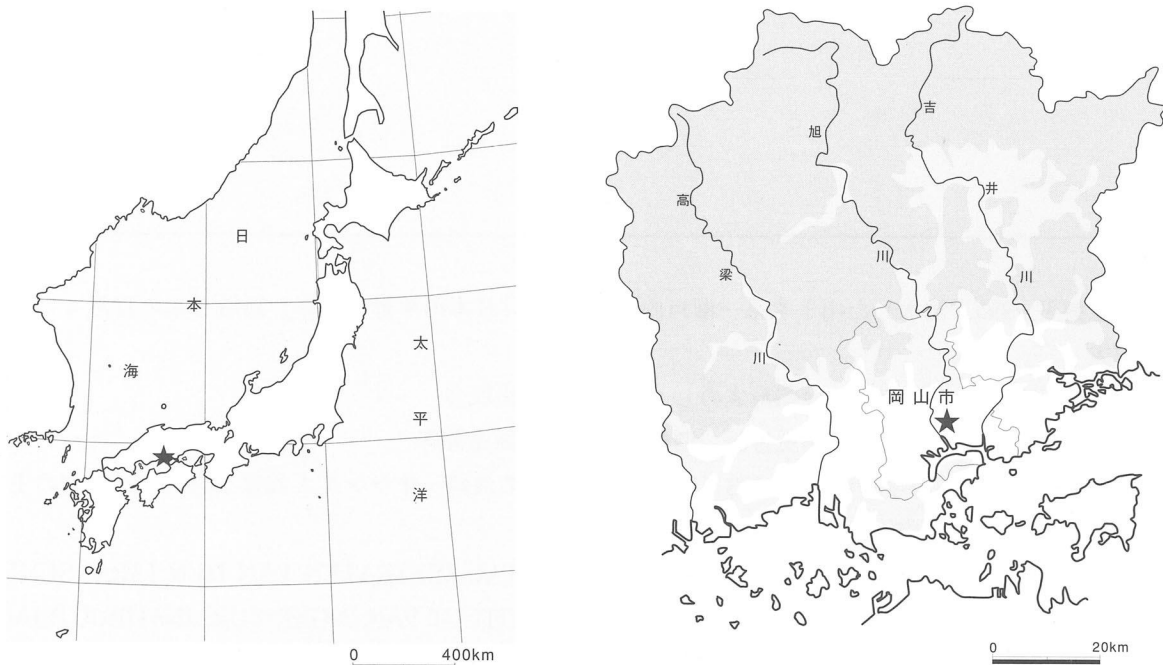
# 第 I 章 位置と環境

## 1 旭川下流域平野の地理的環境

### a. 児島湾と旭川下流域平野の発達

岡山市街は旭川<sup>あさひがわ</sup>下流域から河口部の沖積平野－狭義の岡山平野に所在する。旭川下流域平野は瀬戸内海の多島海と吉備高原と呼ばれる隆起準平原の山並みに挟まれた平野群の一部である。氷期には海水面の低下により瀬戸内海は陸地化していたといわれ、塩飽諸島<sup>しあくしょとう</sup>付近を分水嶺<sup>ぶんすいれい</sup>として旭川は東流し、古大阪川<sup>こおさかがわ</sup>に合流、紀伊水道から太平洋に注いでいた<sup>(1)</sup>。

この地域は隆起運動の不活発な地域であり、侵食された老年期の山地が後氷期の海進により水没した姿が瀬戸内海の多島海といわれる。旭川下流域平野はこうした多島海を埋める形で発達した三角州平野ととらえられる。現在でこそ平野の南側は広大な干拓地がひろがり児島半島との間に狭矮な児島湖<sup>こじま</sup>、児島湾を残すのみであるが、かつては吉備穴海<sup>きびのあなうみ</sup>と呼ばれる海がひろがっており、児島半島や早島丘陵はその名のとおり独立した島であった。『平家物語』では現在の倉敷市<sup>ふじと</sup>藤戸付近において浅瀬を渡り先陣をきるエピソードが語られており、少なくとも中世初頭までは、干潮時には人馬が渡れる程度の浅瀬になりながらも島であったことがわかる。そもそも、旭川は隆起量の少なかった山地を通して流れ下るため、流域面積に比して土砂の流出量が少ない川であり<sup>(2)</sup>、下流域平野も、特に発達した平野とはいえない。しかしながら、近代初頭には岡山南部の山林はほとんど伐採され、土砂の流出も激しいものであったといわれる。明治32年の『児島湾開墾第一区第二区工事設計説明書』<sup>(3)</sup>には「児島湾は毎朝半紙一枚宛の厚さに埋没しつつあり」という児島湾沿岸漁民の俗言が紹介されている。また、児島湾干拓に際し明治14年（1881）、現地調査に訪れた内務省工師 A.T.L.ローエンホルスト ムルデルは、藩政時代には山林の伐採が厳しく規制されていたため、



第 1 図 岡山市と旭川下流域平野の位置



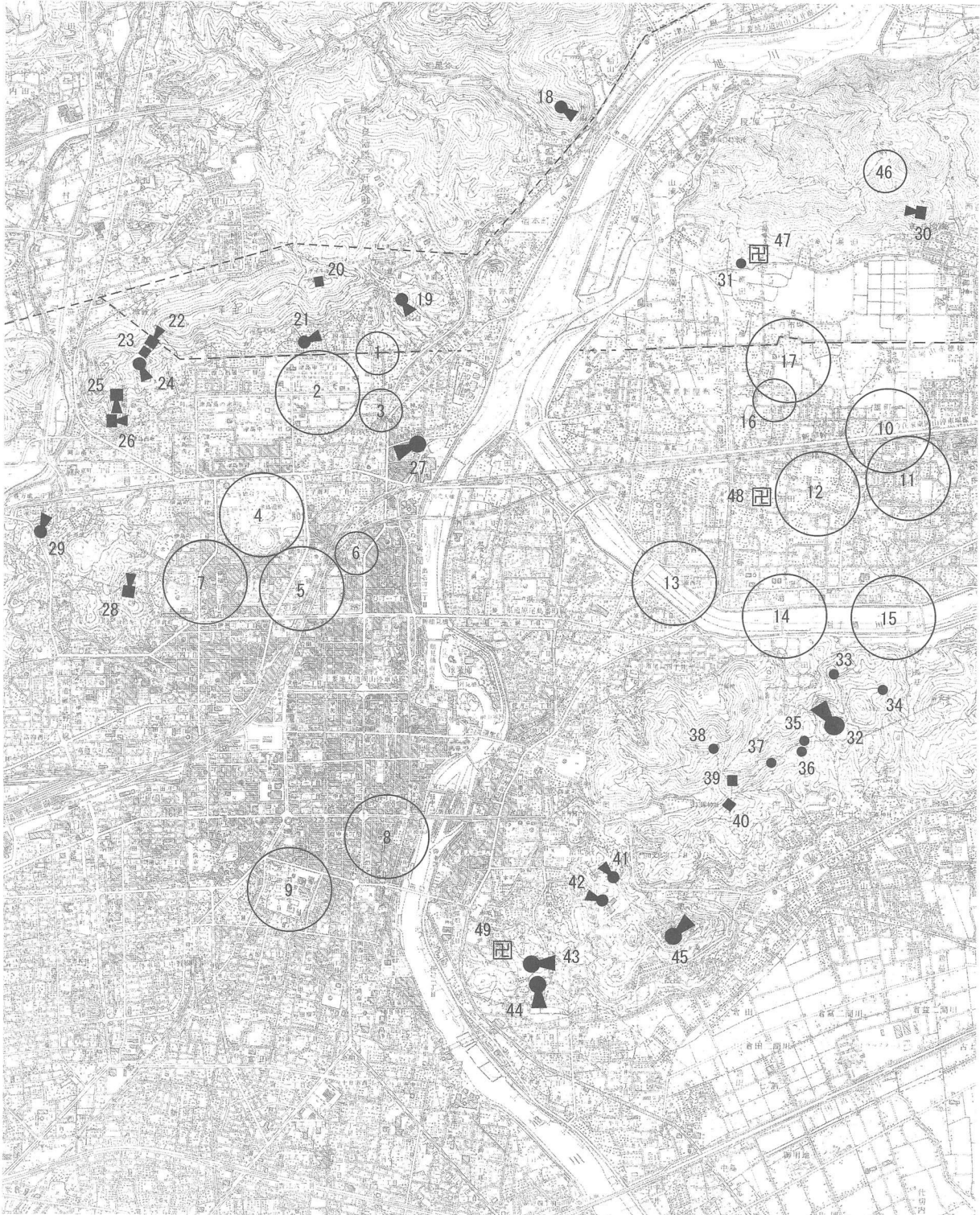
禁制の行き届かなくなった明治維新以降、こうした土砂の堆積が急速に進行したことを指摘している(4)。

#### b. 旭川下流域平野の微地形

旭川下流域平野は北を半田山山塊、竜ノ口山山塊、南を海と操山山塊、西を京山、矢坂山山塊、東を山王山、芥子山などに囲まれ、比較的独立した小地域を形成している。平野はほぼ中央を南北に流れる旭川によって大きく二分されている。古代においても旭川は郡界となっており、西側は御野郡、東側は上道郡になっている。微地形、遺跡の分布などから旭川下流域平野をみると、竹田-浜-国富付近の旭川本流河道・氾濫原地帯をはさんで、東岸では祇園-国府市場、高島新屋敷-雄町、赤田-乙多見、関-神下、兼基付近の自然堤防帯、その背後の後背湿地に、西岸では石山、天神山の南から天瀬-鹿田、二日市の自然堤防帯、御野-津島、南方-伊福町付近の自然堤防帯、津島西坂、津島笹ヶ瀬付近の後背湿地に大きく分けられる。また、東岸平野の東端部、操山山塊の東側は、747年(天平19年)に成立した『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』にみえる「石間江」に比定されており、深い入江状になっていた。一方、西岸平野の西側、笹ヶ瀬川流域は厚いシルト層を堆積する地域であり(5)、先にあげた『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』においても、尾上、花尻付近とされる「比美葦原」、大安寺付近とされる「長江葦原」といった湿地帯が広がっていたと思われ、それ以前は笹ヶ瀬川に沿ってかなり深くまで干潟状の入江であったと思われる。

#### 註

- (1) 貝塚爽平 1995「沈水した山と水系一瀬戸内海の島々」『日本の平野と海岸』新版日本の自然 4 岩波書店
- (2) 須賀堯三 1992『川の個性一河相形成のしくみ一』鹿島出版会
- (3) 井上経重編 1903『児島湾干拓史付録 開墾工事方法』岡島書店
- (4) 建設省岡山河川工事事務所編 1993『日本列島の三つの海峡-オランダ人御雇工師「ムルデル」の王立技術研究所会報・論文-』  
(原著:A.T.L.Rouwenhorst Mulder (1893) EEN DRIETAL ZESTRATEN VAN DEN JAPANSCHEN ARCHIPAL. TIJDSCHRIFT VAN HET KONINKLIJK INSTITUUT VAN INGENIEURS, INSTIRUUTSJAAR 1892-1893, TS' SGRAVENHAGE, BIJ GEBRS.J.&H.VAN LANGENHUYSEN.)
- (5) 斎藤伸英 1983「笹ヶ瀬川・足守川流域」『岡山県史』第1巻 自然風土 岡山県



第2図 旭川下流域平野の主要な遺跡 (1/50,000)

- 1 朝寝鼻貝塚 2 津島岡大遺跡 3 津島江道遺跡 4 津島遺跡 5 南方遺跡 6 南方釜田遺跡 7 上伊福遺跡
- 8 天瀬遺跡 9 鹿田遺跡 10 雄町遺跡 11 乙多見遺跡 12 赤田東遺跡 13 百間川原尾島遺跡 14 百間川沢田遺跡
- 15 百間川兼基・百間川今谷遺跡 16 中井三反田遺跡 17 備前国府関連遺跡 18 片山古墳 19 一本松古墳
- 20 ダイミ山古墳 21 塚の本古墳 22 都月坂1号墳 23 都月坂2号墓 24 都月坂3号墳 25 七つ坊1号墳
- 26 七つ坊5号墳 27 神宮寺山古墳 28 津倉古墳 29 青陵古墳 30 備前車塚古墳 31 唐人塚古墳 32 金蔵山古墳
- 33 沢田大塚古墳 34 操山51号墳 35 操山21号墳 36 二又古墳 37 八畳岩古墳 38 萩の塚古墳 39 護国神社裏山古墳
- 40 旗振台古墳 41 操山103号墳 42 操山106号墳 43 網浜茶臼山古墳 44 操山109号墳 45 湊茶臼山古墳
- 46 竜ノ口古墳群 47 賞田廃寺 48 幡多廃寺 49 網浜廃寺

点線 = 古代山陽道(推定)

## 2 旭川下流域平野の歴史的環境

### a. 縄文時代以前

旭川下流域平野周辺に人類の痕跡が最初に認められるのは旧石器時代であるが、操山山塊の旗振台古墳北部（操山218号遺跡）、常住寺東南（操山217号遺跡）<sup>(1)</sup>、操山219号遺跡からわずかに石器が採集されているに過ぎない。縄文時代には中期以前の遺跡は今までのところ断片的であり、縄文早期の押型紋土器などが散発的に出土する程度である。縄文前期には後氷期の海面上昇により沖積地部分は大半が水没していたと思われるが、その実態はほとんど未解明である。南方釜田遺跡ではアカホヤ火山灰が確認されており、降灰当時は干潟状の浅海底であったことが確認されている<sup>(2)</sup>。沖積地の形成が進むと平野部においても遺構遺物が確認されるようになる。縄文中期後半には東岸平野で百間川沢田遺跡<sup>(3)</sup>、後期には西岸平野で朝寝鼻貝塚<sup>(4)</sup>、津島岡大遺跡<sup>(5)</sup>と丘陵部から平野に向かう微高地上に立地しているものが多く、沖積地では鹿田遺跡<sup>(6)</sup>でわずかではあるが土器が出土している。晩期および突帯紋土器段階には遺跡数も増加し、東岸平野では百間川沢田遺跡、百間川原尾島遺跡<sup>(7)</sup>、関遺跡<sup>(8)</sup>、雄町遺跡<sup>(9)</sup>、西岸平野では津島岡大遺跡、津島江道遺跡<sup>(10)</sup>、津島遺跡<sup>(11)</sup>、南方釜田遺跡<sup>(12)</sup>、鹿田遺跡などがあげられ、沖積地の発達とともに生活領域が拡大していった様子が看取される。特に津島江道（岡北中）遺跡では限られた範囲ながら、突帯紋土器を伴出する水田跡を検出しており注目される。稲作農耕の開始に関しては近年、総社市南溝手遺跡でイネの籾圧痕のある縄文後期の土器が出土しており<sup>(13)</sup>、少なくとも縄文時代後期から行われていた可能性を考えなくてはならない。しかし、沖積平野の発達史がほとんど明らかになっていない現在、平野部での遺跡の増加を一元的に稲作に結び付けることは短絡的であろう。上記の遺跡の分布からは沖積平野の大部分は縄文晩期には既に形成されていたと思われ、後期以前の沖積地はいまだ未発達な状態にあったと思われ、その中で稲作適地がどれほどあったのかは疑問である。また津島岡大遺跡、百間川沢田遺跡の後期集落では堅果類を貯蔵した貯蔵穴群が盛んに作られており、百間川沢田遺跡では貝塚も形成されていることから沖積地進出の契機になるほど稲作に依存した社会であったとは考えがたい。根木修はこの沖積地への進出について、淡水水辺環境から供給される食用動植物の獲得を指摘しており注目される<sup>(14)</sup>。

### b. 弥生時代

弥生時代前期には縄文晩期の遺跡から継続しつつも規模を飛躍的に拡大するものが多い。西岸平野の津島遺跡、津島岡大遺跡、津島江道（岡北中）遺跡、南方遺跡などで集落跡や水田跡が検出されている。東岸平野では百間川沢田遺跡で水田跡や環濠集落がみついているほか、原尾島遺跡、今谷遺跡、兼基遺跡、米田遺跡においても遺構や遺物が検出されている。

中期前葉から中葉には東西両岸平野とも複数の微高地にまたがる大規模な集落遺跡群が形成される。西岸平野では南方の蓮田、宝崎、釜田などの遺跡群<sup>(15)</sup>、東岸平野では雄町、乙多見、関、赤田、今谷、兼基などの遺跡群があげられる。南方遺跡では生駒西麓産の土器のほか、東九州、南九州の土器なども出土しており<sup>(16)</sup>、遠隔地との交流を行うとともに、木製品、石器の生産を行う拠点集落であったと考えられる。なお、東岸平野では、雄町遺跡から出土した偏平紐式四区袈裟襷紋銅鐸<sup>(17)</sup>、今谷・兼基遺跡のすぐ南にあたる操山山塊の谷部から出土した3個体の銅鐸のうち現存する1個は偏平紐式六区袈裟襷紋銅鐸<sup>(18)</sup>が知られており、やや離れるが、東岸平野東方の岡山市草ヶ部から偏平紐式六区袈裟襷紋銅鐸<sup>(19)</sup>、岡山市百枝月から外縁付紐式四区袈裟襷紋銅鐸、偏平紐式四区袈裟襷紋銅鐸2個体が出土している<sup>(20)</sup>。それに対し、西岸平野では津島遺跡、上伊福九ノ坪遺跡から銅鐸形土製品<sup>(21)</sup>が、青銅器としては南方（国立病院）遺跡から銅剣片が出

土している<sup>(22)</sup>が、現在まで銅鐸は知られていない。このことは、東西両岸平野集団の優劣を示すというよりは、むしろ銅鐸分布の西限地域の状況としてとらえられるものと思われる。

中期後半から後期にはさらに遺跡数の増加する。百間川遺跡群では後期末から古墳時代初頭の水田跡が洪水砂に覆われた状態で検出されており、その総延長は約3kmにも及ぶ。この百間川遺跡群の水田と同時期と思われる水田は、東岸平野ばかりでなく西岸平野の各遺跡でも検出されており、この時期旭川下流域平野のかなりの部分が水田化されていた可能性がある。こうした状況が古墳時代前期の前方後円墳の展開につながることは間違いないが、その一方で弥生後期の弥生墳丘墓は都月坂2号墓<sup>(23)</sup>が知られているにすぎない。ほかに祇園の茶白山古墳<sup>(唐人家東弥生墳丘墓)</sup><sup>(24)</sup>、津島西坂、津島笹ヶ瀬の七つ塚8号墳、9号墳が弥生時代にさかのぼる可能性が指摘されている以外は、京山山塊などで土器棺などが出土したことが伝えられる<sup>(25)</sup>が、いわゆる首長墓とは言い難い。特殊器台もほとんど空白地に近い状態で、津島遺跡からの出土が知られているのみである<sup>(26)</sup>。また、旭川下流域平野から離れるが、中山山塊の矢藤治山弥生墳丘墓<sup>(27)</sup>から出土した特殊器台・特殊壺には旭川下流域の特殊器台形埴輪に特徴的な暗赤褐色の粒子が含まれており、旭川下流域の集団とその後の特殊器台形埴輪の展開に何らかの関係があったものと思われる。

### c. 古墳時代

古墳時代の初頭には、特殊器台形埴輪をもついわゆる「最古型式」の前方後円(方)墳が西岸平野北部の半田山山塊に七つ塚1号墳(前方後方墳 47m)<sup>(28)</sup>、都月坂1号墳(前方後方墳 30m)<sup>(29)</sup>、東岸南部の操山山塊南西端部に網浜茶白山古墳(前方後円墳 92m)<sup>(30)</sup>、操山109号墳(前方後円墳 76m)と旭川下流域平野を取り囲むように築造される。この特殊器台形埴輪をもつ古墳のありかたは特徴的で、特殊器台形埴輪17例中4例、吉備における出土例の内、転用などを除くものに限れば5例中の4例がこの地域に集中することとなり、弥生墳丘墓、特殊器台が空白に近い状態であったことからすると異常ともいえる。また、東岸には三角縁神獸鏡11面など計13面の中国鏡を出土した備前車塚古墳(前方後方墳 48m)<sup>(31)</sup>が築かれるほか、時期決定の根拠に欠けるものの、津倉古墳(前方後方墳 45m)、片山古墳(前方後円墳 60m)などもこの段階に位置付けられる可能性が高い<sup>(32)</sup>。

これらに続く時期には東岸平野東端部に特殊器台形埴輪の特徴を残す最古段階の円筒埴輪をもつ宍甘山王山古墳(前方後円墳 68.5m)<sup>(33)</sup>をはじめ、湊茶白山古墳(前方後円墳 130m)<sup>(34)</sup>、神宮寺山古墳(前方後円墳 150m)<sup>(35)</sup>、金蔵山古墳(前方後円墳 165m)<sup>(36)</sup>がある。操山山塊にはほかに、時期不明ではあるが操山103号墳(前方後円墳 32m)<sup>(37)</sup>、操山106号墳(前方後円墳 41m)といった前方後円墳が南西部に存在するほか、旗振台古墳(方墳 20×15m)<sup>(38)</sup>、護国神社裏山古墳(円ないし方墳 13m)<sup>(39)</sup>、経塚古墳(円墳 28m)<sup>(40)</sup>などの古墳が存在する。これら操山山塊の古墳は、古代の郡界が旭川にあることもあり、一般的に旭川東岸平野を基盤とする首長墓とされる。しかし、操山山塊南西部の古墳からは東岸平野を眺望することはできないことから、鹿田遺跡、天瀬遺跡など西岸平野南部の遺跡群に基盤を求める説<sup>(41)</sup>もある。いずれにしても操山山塊の南はすぐ麓まで吉備穴海がせまっていたと考えられ、吉備穴海の海上交通を強く意識した選地と考えられる。

金蔵山古墳以降の5～7期には、備中の足守川流域から高梁川東岸域に全国第4位の規模を誇る造山古墳(前方後円墳 360m)をはじめ総社市作山古墳(前方後円墳 286m)、総社市宿寺山古墳(前方後円墳 318m)など屈指の大形前方後円墳が次々と築造されるのに対し、旭川下流域平野では西岸平野北部の一本松古墳(前方後円墳 65m)<sup>(42)</sup>、津島福居にかつて存在した塚の本古墳(前方後円墳 40m?)<sup>(43)</sup>があげられるにすぎず、前方後円墳の築造は低調になる。代わって、砂

川中流域西岸に赤磐市両宮山古墳（前方後円墳 192m）を中心とする古墳群が形成される。この砂川中流域の盆地は後に古代山陽道のルートとなる陸上交通の要衝で、陸上交通路の整備に伴い古墳の選地も移動したものととらえられる、この変化は備中南部においても、尾上車山古墳、中山茶白山古墳と海に面した丘陵上に築造されていたものが、造山古墳、作山古墳などは後の山陽道周辺に築造されており、共通した動きと見ることができる。

古墳時代後期には操山山塊、東岸平野北側の竜ノ口山山塊に数多くの横穴式石室墳が築かれる。特に操山山塊には、全長11.4mという大形の横穴式石室をもつ沢田大塚古墳<sup>(44)</sup>、二又にわかれた特異な横穴式石室をもつ操山24号墳（二又古墳）<sup>(45)</sup>など特徴的な古墳が存在する。また、終末期には竜ノ口山山塊西部の山裾に切石風の整美な横穴式石室をもつ唐人塚古墳<sup>(48)</sup>が築かれる。一方、西岸平野周辺では後期古墳の存在は知られておらず、北西の津高盆地部、西の矢坂山山塊に認められるものの、東岸の状況に比べ質量ともに貧弱であるうえ、立地的にも西岸平野と直接的な関係を想定することは難しい。網浜茶白山古墳の所在する操山山塊南西部も操山山塊の他の地域と異なり後期古墳はなく、前期以来西岸平野と同様の展開を示すことが注目される。

#### d. 古代以降

古代の東岸平野は備前国府や賞田廃寺を始めとする古代寺院を擁する備前の政治的中心地をなす。備前国府は上道郡域の国府市場から高島新屋敷、国長宮を中心とする地域に想定されているが、『和名類聚抄』には「国府在、美能郡。」とあり、古くから古地名考証や旧河道の検討などが盛んに行われてきた。国府市場周辺からは広い範囲で奈良～平安時代の遺物が出土しており、国府域の推定にも諸説があるが、未だ政庁など国府中枢に係わる遺構等は検出されていない。しかし南古市場（高島公民館）遺跡<sup>(47)</sup>からは河道を中心に9～10世紀の土器が多量に出土しているほか、ハガ遺跡<sup>(48)</sup>では国府付属寺院の可能性も指摘されている。上道郡衙などもふくめこの地域に集中している可能性もあり、今後の範囲確定や周辺遺跡の調査に期待がかかる。また、この周辺には賞田廃寺<sup>(49)</sup>、幡多廃寺<sup>(50)</sup>のほか、成光寺廃寺、居都廃寺、網浜廃寺など複数の古代寺院が存在することも注目される。先述のとおり東岸平野の東端部、操山山塊の東側は『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』にみえる「石間江」に比定されている。この「石間江」に面した百間川米田遺跡では奈良時代の官衙的な施設が検出されており、付近に「船着」の地名を残すことから「備前国府津」の可能性が指摘されている<sup>(51)</sup>。

西岸平野では津島江道遺跡<sup>(52)</sup>から奈良時代に比定される倉庫群と区画溝が検出されており、古代山陽道の枝道と言われる「福林寺縄手」がこの遺跡の北方を通っていることから御野郡衙の関連施設である可能性が指摘されている。また、古代寺院が集中する東岸平野と異なり、古代寺院が皆無の状況も注意される。後期古墳が御野郡域に無い状況と合わせ、津高郡も三野臣氏の領域と考えられることを理由に、津高郡域の古墳、寺院にそれを求める意見もあるが<sup>(53)</sup>、一方で、やや時代が下るが、上道郡で1社、隣接する津高郡などでも2社程度でしかないいわゆる「式内社」が御野郡域には8社存在しており、この地域の地域集団の性格や嗜好なども関係している可能性がある。

また、この地域は条里制地割りがよく残存しており、古代から中世にかけては藤原摂関家の殿下渡領である鹿田庄をはじめとする荘園が多く分布する。また、操山山塊南麓には古代後半から中世にかけて形成された小貝塚多数存在する。この地域の古代から中世の集落に関しては未だ不明な部分が多いが、鹿田遺跡、大供遺跡、岡山城二の丸跡、百間川遺跡群などで徐々に資料が蓄積されつつある。

## 註

- (1) 鎌木義昌 1962「第一編原始時代」『岡山市史 古代編』岡山市役所
- (2) 福武書店本社建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会 1989「岡山平野発見の火山灰」『古代吉備』第11集 古代吉備研究会
- (3) 岡田 博他 1985「百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会  
平井 勝・岡本寛久 1993「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会
- (4) 鎌木義昌・亀田修一 1986「16朝寝鼻貝塚」『岡山県史』考古資料 岡山県
- (5) 山本悦世他 1992「津島岡大遺跡3-3次調査-」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (6) 山本悦世他 1988「鹿田遺跡I」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (7) 浅倉秀昭他 1980「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 ほか
- (8) 石坂俊郎 1990「岡山市関遺跡出土の縄文晩期土器」『古代吉備』第12集 古代吉備研究会
- (9) 高橋 護・正岡睦夫他 1972「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告1』岡山県教育委員会
- (10) 神谷正義 1988「津島江道遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開』日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡考古学会  
神谷正義 1991「津島江道遺跡」『第30回埋蔵文化財研究集会各地域における米づくりの開始』埋蔵文化財研究会 第30回研究集会実行委員会
- (11) 津島遺跡調査団 1969『昭和44年岡山県津島遺跡調査概報』岡山県教育委員会 1970『岡山県津島遺跡調査概報』
- (12) 岡山市教育委員会 1995『平成7年度埋蔵文化財発掘速報展』資料  
草原孝典・河田健司 1977『吉野口遺跡』岡山市教育委員会
- (13) 平井泰男他 1995「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100』岡山県教育委員会
- (14) 根木 修 1992「水稻農耕の展開」『吉備の考古学的研究』(上) 山陽新聞社
- (15) 出宮徳尚・伊藤 晃 1971『南方遺跡発掘調査概報』岡山市遺跡調査団  
出宮徳尚・神谷正義・岡崎順子 1981『南方(国立病院)遺跡発掘調査報告』岡山市遺跡調査団  
柳瀬昭彦・岡本寛久 1981「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40』岡山県教育委員会
- (16) 岡山市教育委員会の調査で、南方(国体開発)遺跡の平安時代河道から生駒西麓産の流水紋の施された壺形土器が、南方(済生会病院)遺跡の弥生中期河道から南九州、東九州からの搬入品とおもわれる甕形土器等が出土している。
- (17) 高橋 護 1990「岡山市雄町遺跡の銅鐸」『考古学雑誌』75-4 日本考古学会
- (18) 梅原末治 1951「岡山県下発見の銅鐸」『吉備考古』83 吉備考古学会  
鎌木義昌 1961「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編 東京堂出版
- (19) 木村幹夫 1973「原始・古墳時代」『上道町史』
- (20) 近藤義郎 1951「備前百枝月発見の銅鐸」『古代吉備』第4集 古代吉備研究会  
近藤義郎・根木 修 1973「岡山市百枝月発見の銅鐸」『考古学研究』第19巻第4号 考古学研究会
- (21) 岡田 博 1984「銅鐸」『えとのす』24 新日本教育図書  
中野雅美・根木 修 1986「49上伊福九坪遺跡」『岡山県史』考古資料 岡山県

- (22) 出宮徳尚 1986 「39 南方遺跡」『岡山県史』考古資料 岡山県
- (23) 近藤義郎 1986 「53 都月坂 2 号弥生墳丘墓」『岡山県史』考古資料 岡山県
- (24) 宇垣匡雅 1992 「特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究』(上) 山陽新聞社
- (25) 永山卯三郎 1936 「上古」『岡山市史』第一 岡山市役所
- (26) 島崎 東他 2003 「津島遺跡 4 - 岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査 -」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173』岡山県教育委員会
- (27) 近藤義郎他 1995 「矢藤治山弥生墳丘墓」矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団
- (28) 近藤義郎他 1987 「七つ塚古墳群」七つ塚古墳群発掘調査団
- (29) 近藤義郎 1986 「115 都月坂1号墳」『岡山県史』考古資料 岡山県
- (30) 宇垣匡雅 1990 「網浜茶臼山古墳・操山109号墳の測量調査 1 - 吉備の前期古墳Ⅲ -」『古代吉備』第12集 古代吉備研究会
- (31) 近藤義郎 1986 「109 備前車塚古墳」『岡山県史』考古資料 岡山県
- (32) 安川 満 2000 「片山古墳と津倉古墳」『吉備の古墳 上 備前・美作』吉備考古学ライブラリィ・4 吉備人出版
- (33) 宇垣匡雅 1988 「宍甘山王山古墳の測量調査 - 吉備の前期古墳Ⅱ -」『古代吉備』第10集 古代吉備研究会
- (34) 近藤義郎 1986 「112 湊茶臼山古墳」『岡山県史』考古資料 岡山県
- (35) 鎌木義昌 1962 「神宮寺山古墳」『岡山市史 古代編』岡山市
- (36) 西谷真治・鎌木義昌 1959 『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第 1 冊 倉敷考古館
- (37) 草原孝典 2002 「第1章 位置と環境」『新道遺跡 - 備前国鹿田庄関連遺跡の発掘調査 -』岡山市教育委員会
- (38) 鎌木義昌 1962 「護国神社裏山古墳」『岡山市史 古代編』岡山市
- (39) 鎌木義昌 1962 「旗振台古墳」『岡山市史 古代編』岡山市
- (40) 鎌木義昌 1962 「その他の古墳」『岡山市史 古代編』岡山市
- (41) 松木武彦 1993 「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団 - 鹿田集落の地域史的位置づけ -」『鹿田遺跡 3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第 6 冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (42) 近藤義郎 1986 「114 一本松古墳」『岡山県史』考古資料 岡山県
- (43) 永山卯三郎 1936 「福居ノ古墳群」『岡山市史』第一 岡山市役所  
近藤義郎 1988 「岡山市津島の俗称『おつか』と称する前方後円墳についての調査の概略報告」『古代吉備』第10集 古代吉備研究会
- (44) 岡山理科大学学友会考古学部 1970 「沢田大塚古墳」『サヌカイト』第 2 号
- (45) 出宮徳尚 1986 「110 操山古墳群」『岡山県史』考古資料 岡山県
- (46) 伊藤 晃 1986 「127 唐人塚古墳」『岡山県史』考古資料 岡山県
- (47) 岡山市教育委員会による発掘調査。
- (48) 草原孝典 2004 『ハガ遺跡 - 備前国府関連遺跡の発掘調査 -』岡山市教育委員会
- (49) 伊藤晃・出宮徳尚・水内昌康 1971 『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会
- (50) 出宮徳尚・根木 修・間壁忠彦・間壁葎子・水内昌康 1975 『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団
- (51) 巖津政右衛門 1962 「第五編 奈良時代」『岡山市史 古代編』岡山市役所
- (52) 高畑知功 1988 「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18 岡山県教育委員会
- (53) 註 (37) 文献

## 第II章 神宮寺山古墳

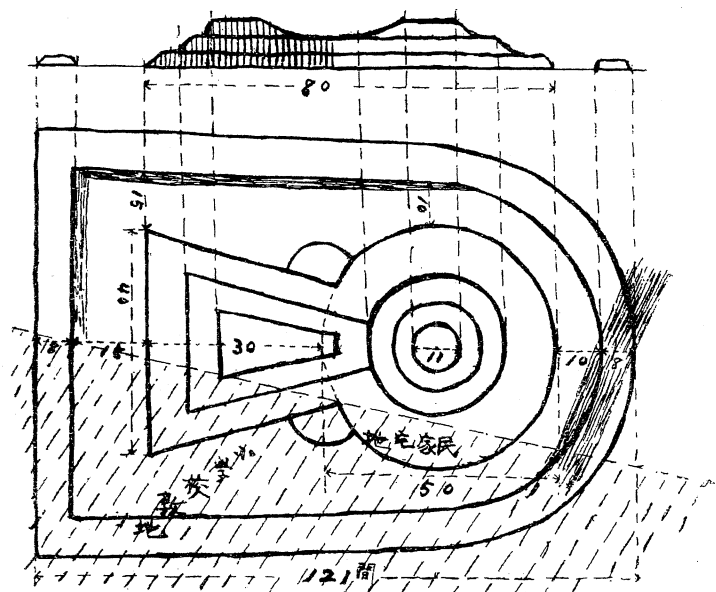
### 1 神宮寺山古墳の位置と周辺

#### 1) 神宮寺山古墳の概要

神宮寺山古墳は旭川西岸平野北部に所在する前方後円墳であり、昭和34年5月13日付けで史跡に指定されている。行政的には岡山市中井町1丁目にあたり、律令制下には御野郡御野郷に属していた。現在、後円部には天計神社が鎮座し、前方部は墓地に、周囲は宅地や小学校地によりかなり削られており、特に南側では原形を留めない。前方部をほぼ西に向けており、全長約150m、後円部径約70m、同高約13m、前方部長約75m、同高7mを測る。前方部2段、後円部3段築成で、北側くびれ部には造出し状のやや緩やかな斜面があり、その部分に造出しを想定する見解もある。墳丘斜面には葺石があり、円筒埴輪等が採集されている。内部主体は後円部墳頂に竪穴式石槨の蓋石が露出しており、副葬品用の副室とされる小竪穴式石室の存在も知られている。この副室は1961年に乱掘され、100を超える鉄剣、鉄刀、鉄鎌、鉄斧、鑿、錐、鋸などが出土した<sup>(1)</sup>。副室は長さ150cm、幅50~60cm、高さ約90cmを測り、床面は砂利敷きであった。副室の長軸線は墳丘の主軸とほぼ平行であり、蓋石の露出した石槨とずれた位置関係にあるため、現在天計神社拜殿の下になっている部分にもう1基の主体部の存在が想定される。また、前方部からも「古刀、甲冑及槍鎗」の破片が出土したといい<sup>(2)</sup>、前方部にも主体部の存在が予想される。また、前方部周辺を「千人坪」と称するといわれ<sup>(3)</sup>、埴輪列の存在からの呼称と考えられている。

本古墳は古くから注目された古墳で、江戸時代の土肥経平『寸箴の地理』や松本亮『東備郡村誌』弘西郷の条に記事がみえる<sup>(4)</sup>。『寸箴の地理』では「天子或は后妃皇子の陵というべき方料なるものなり」とし、被葬者を景行天皇の皇子・吉備兄彦と推定する。『東備郡村誌』では「古は周池ありしとみえて、陵下の廻り平地低し」として、周濠の存在を指摘する。また、永山卯三郎は『岡山市史』第1において、周辺の水路や地形に周濠の痕跡があるとし、盾形周濠、造出を備えた断面・平面図を掲載している(第3図)。また、『寸箴の地理』を引用し、その被葬者の推定に疑問を投げかけている<sup>(5)</sup>。『岡山市史』古代編において鎌木義昌もこの『東備郡村誌』、永山の記述から周濠の存在を予想し、外形、副室出土の副葬品から金蔵山古墳に近い時代の築造とした<sup>(6)</sup>。

一方、西川宏は金蔵山古墳を4世紀後半、神宮寺山古墳を5世紀前半とし、旭川東岸が金蔵山古墳の築造を最後に前方後円墳が築かれなくなるのに対し、西岸では神宮寺山古墳



第3図 神宮寺山古墳断面・平面図(註(5)文献より)



以降も築造されることから東西両岸平野統合が神宮寺山古墳のころ達成されたと評価した<sup>(7)</sup>。また、春成秀爾は神宮寺山古墳採集の埴輪の

- ①縦刷毛後の横刷毛を施したのも微量含まれるものの、内外面共に縦刷毛がほとんどであること。
- ②透かし孔は長方形であること。
- ③タガの突出度が大きい。
- ④丹（赤色顔料）を塗ったものが非常に多い。

という特徴から、川西編年のⅠ期に属すものと考え、4世紀中頃を前後する時期とする。金蔵山古墳に関しては4世紀後半～末とし、神宮寺山古墳を金蔵山古墳に先行するものと位置付けた<sup>(8)</sup>。

現在では、築造時期については埴輪の特徴と金蔵山古墳との副葬品や墳形の対比から4世紀後半～5世紀初頭、10期編年の3～4期のうちに位置付けることがほぼ定着している<sup>(9)</sup>。

なお、現在後円部に鎮座する天計神社は式内社であるが、北方村内の「幸田畑」にあったものを、岡山城主小早川秀秋がこの地に移したものである。この天計神社の別当坊として妙法山神宮寺があったが、池田光政の行った寛文年間の寺社整理で廃寺となった<sup>(10)</sup>。

## 2) 神宮寺山古墳の位置と周辺の遺跡

神宮寺山古墳の東側には旭川が流れ、当時は旭川本流と現在、西川用水や観音寺用水などの流路になっている分流の分岐点付近と思われる旭川西岸平野の最東部にあたる。沖積地とはいえ微高地上に立地すると思われ、岡山市教育委員会が実施した周辺の立会調査においても微高地基盤層が確認されている。盛土中に含まれていたと思われる弥生土器も採集されており、神宮寺山古墳下や盛土の供給源となった周辺の微高地に弥生時代の集落が存在していたことが予想される。周辺には、津島江道遺跡、津島岡大遺跡、津島遺跡、南方釜田遺跡などが存在する。また、平野北縁、西縁の半田山山塊、京山山塊には神宮寺山古墳に先行、あるいは後続する諸古墳が築かれている。

半田山山塊には、西端部に七つ坨古墳群、都月坂古墳群、東端部に一本松古墳を中心とする古墳群があり、半田山中部の山頂にはダイミ山古墳、南縁の平野部に既に滅失しているが塚の本古墳（おつか様古墳）が存在する。一方、京山山塊には津倉古墳、青陵古墳が、北東にやや離れた旭川を見下ろす山頂部には片山古墳などが存在する。

七つ坨古墳群<sup>(11)</sup>は半田山山塊西端部の烏山から南に突出する尾根上に立地する7基からなる古墳群である。岡山大学考古学研究室によって1号墳、3号墳、5号墳、7号墳などが発掘調査されている。尾根先端部の10号地点では弥生時代後期の集団墓も検出され、また尾根の最上部の2基の方墳は弥生時代にさかのぼる可能性もある。七つ坨1号墳は前方部を南にむける前方後方墳で全長約47mを測る。後方部、前方部にそれぞれ竪穴式石槨が存在し、後方部石槨からは鏡の破片、刀、剣、刀子、斧、鎌、針、碧玉製管玉などが出土した。また、特殊器台形埴輪、特殊壺形埴輪が出土しており10期編年のⅠ期に位置付けられる。3号墳（円墳 12m）、5号墳（前方後方墳 25m）、7号墳（方墳？ 約10m）らも4世紀代の築造と思われる。

都月坂1号墳<sup>(12)</sup>は烏山と半田山の間鞍部に立地する前方後方墳で、全長約30mを測る。特殊器台形埴輪、壺形埴輪が伴っており、七つ坨1号墳に続く首長墓と考えられる。また、都月坂1号墳の南東側には都月坂2号弥生墳丘墓、都月坂3号墳が存在する。都月坂3号墳は前方後円墳とされるが、現状では墳丘も不明瞭で墳形等を確認できない。

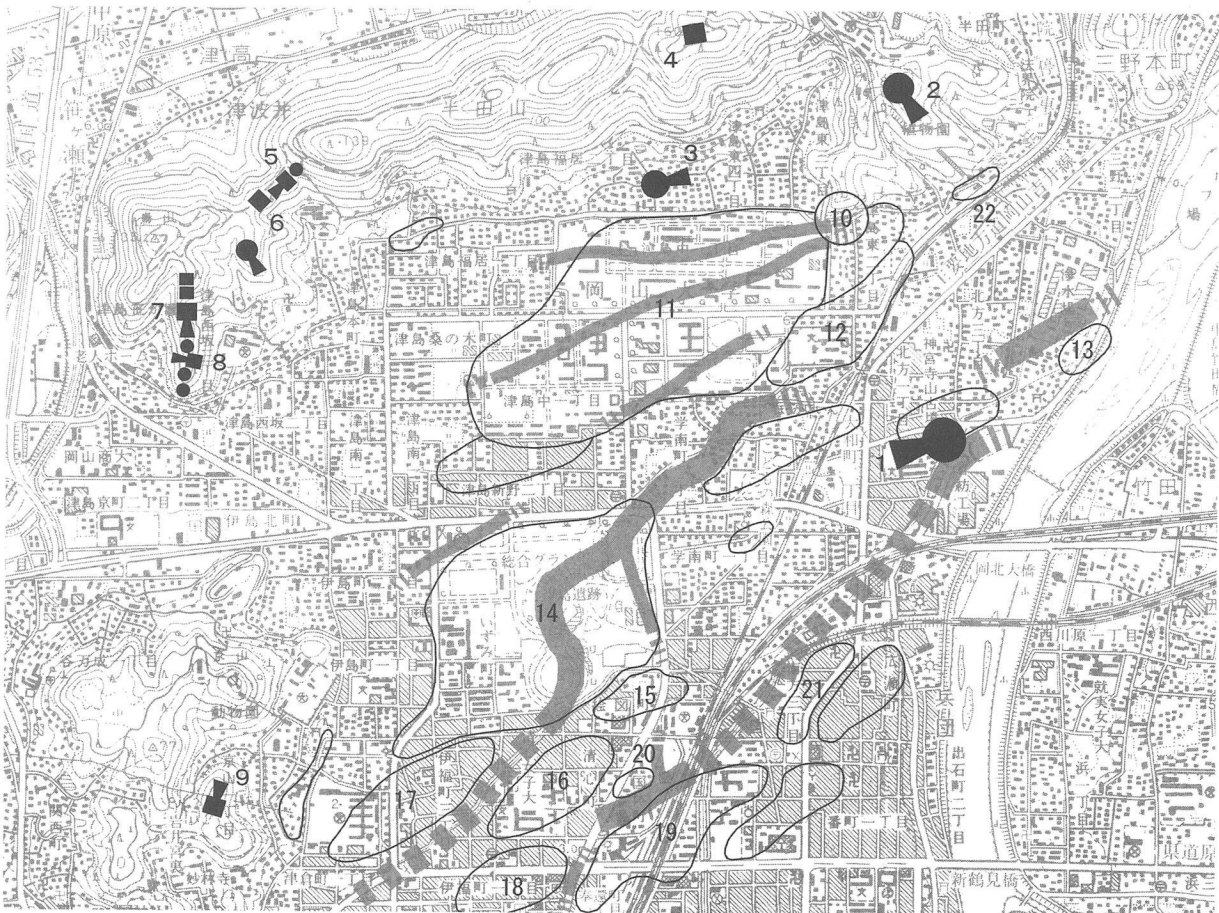
津倉古墳（前方後方墳 39m）、片山古墳（前方後円墳 47m）も埴輪などがなく判断が難しいが、墳形などから1期に位置付けられる可能性が高いといわれる<sup>(13)</sup>。

これらの諸古墳は津倉古墳、片山古墳に関しては不明な部分が多いものの、弥生墳丘墓、あるいは

は集団墓から引き続いて築造されているなど、小地域集団の枠組みの中でそれぞれが築造されているものと考えられる。これらに続いて築造される神宮寺山古墳は、規模も全長150mと飛躍的に巨大化し、それら小集団を統合する首長墓というにふさわしい。一方、神宮寺山古墳に後続するものとしては一本松古墳、塚の本古墳があげられる。

一本松古墳<sup>(14)</sup>は半田山山塊東端の低い山頂に立地する南面する全長約65mの前方後円墳である。周囲には今2基の方墳が伴っているが、かつては小前方後円墳を含む15基の古墳が伴っていたという。後円部には、戦時中の機関砲の設置により大きく破壊されているが、竪穴式石槨が存在する。東京国立博物館には岡山市北方一本松出土品として、鉄地金銅貼眉庇付冑、型式不明の甲、槍、鉄鎚、鉄針が収蔵されている。埴輪などは伴っていないようだが、10期編年の6期の築造と推定されている。

塚の本古墳（おつか様古墳）<sup>(15)</sup>は半田山山麓の平野部に立地していた前方後円墳で、1960年に後円部南側が破壊された後消滅した。全長約30mの東に前方部を向ける前方後円墳で、仿製鏡2面、玉類多数、鉄剣、鉄刀、鉄鏃？多数、眉庇付冑、短甲、馬鈴？が出土したという。副葬品から10期編年の7期と推定されている。また、周辺には数基の小古墳が伴っていたという。しかし、3～4期に位置付けられる神宮寺山古墳と6期とされる一本松古墳、7期とされる塚の本古墳には半世紀ほどもの空白があり、その間に位置付け得る有力な古墳は知られていない。半田山山塊中部山頂のダイミ山古墳（方墳 約20m）がその候補になるものであるが、その規模の縮小と墳形の変化は著



第4図 神宮寺山古墳と周辺の遺跡 (1/25,000)

- |           |              |           |             |            |            |
|-----------|--------------|-----------|-------------|------------|------------|
| 1 神宮寺山古墳  | 2 一本松古墳      | 3 塚の本古墳   | 4 ダイミ山古墳    | 5 都月坂1号墳   | 6 都月坂2号墓   |
| 7 七つ塚1号墳  | 8 七つ塚5号墳     | 9 津倉古墳    | 10 朝寝鼻貝塚    | 11 津島岡大遺跡  | 12 津島江道遺跡  |
| 13 北方長田遺跡 | 14 津島遺跡      | 15 絵図遺跡   | 16 上伊福九の坪遺跡 | 17 伊福定国前遺跡 | 18 上伊福立花遺跡 |
| 19 南方遺跡   | 20 南方(済生会)遺跡 | 21 南方釜田遺跡 | 22 鍵田遺跡     |            |            |

しい。旭川対岸の東岸平野においても金蔵山古墳をもって前方後円墳は姿を消し、かわって旗振台古墳（方墳 27m）が築かれる。この現象について、葛原克人は備中南部の造山古墳の築造の影響と考え、ここにきわめて大きな社会的、政治的変革、すなわち造山古墳の被葬者を頂点とする吉備諸集団の再編成、組織化を指摘する<sup>(16)</sup>。

塚の本古墳以降、西岸平野周辺には有力な古墳や後期古墳も認められない。北西の津高盆地部、西の矢坂山山塊には認められるものの、東岸の状況に比べ質、量ともに貧弱であるうえ、立地的にも西岸平野と直接的な関係を想定することは難しい。

古代の東岸平野は備前国府や賞田廃寺を初めとする多数の古代寺院が集中するのに対し、西岸平野では古代寺院も現状では見つかっていない。『和名類聚抄』には「国府在、美能郡」とあるが、西岸平野には候補となり得る遺跡も未発見である。一方、西岸平野では津島江道遺跡<sup>(17)</sup>から奈良時代の倉庫群と区画溝が検出されており、御野郡衙の関連施設である可能性が指摘されている。

## 註

- (1) 鎌木義昌 1962 「神宮寺山古墳」『岡山市史』古代編
- (2) 永山卯三郎 1936 「神宮寺古墳」『岡山市史』第一
- (3) 註（2）文献
- (4) 吉備群書集成刊行会編 1970 『吉備群書集成』（一）、（二）
- (5) 註（2）文献。永山は当地が『日本書紀』応神天皇22年条の三野県に比定されることから、三野臣の祖とされる吉備弟彦が神宮寺山古墳の被葬者としている。
- (6) 註（1）文献。鎌木は『岡山市史』古代編の中では金蔵山古墳の実年代について述べていない。なお、金蔵山古墳の実年代は報告書では5世紀前半期とされている。  
(鎌木義昌・西谷真治 1961 『金蔵山古墳』倉敷考古館)
- (7) 西川 宏 1975 『吉備の国』古代の国々－5 学生社
- (8) 春成秀爾 1982 「備前の大形古墳の再検討」『古代吉備の再検討』古代を考える31
- (9) 鎌木義昌 1986 「神宮寺山古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料  
葛原克人 1991 「備前地域の前期古墳」『岡山県史』第2巻 原始・古代Ⅰ  
宇垣匡雅 1991 「備前」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社
- (10) 註（2）文献  
妹尾 袞・小林久磨雄・入江勝胤編 1938 「第五編 通世」『岡山市史』第五
- (11) 近藤義郎・高井健司編 1987 『七つ塚古墳群』七つ塚古墳群発掘調査団
- (12) 近藤義郎・春成秀爾 1967 「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号
- (13) 宇垣匡雅 1991 「備前」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社など
- (14) 永山卯三郎 1936 「半田山水源地山上古墳群」『岡山市史』第一  
鎌木義昌 1962 「一本松古墳など」『岡山市史』古代編  
村井 雄 1976 「岡山市一本松古墳出土の冑甲」『MUSEUM』307
- (15) 永山卯三郎 1936 「福居ノ古墳群」『岡山市史』第一  
近藤義郎 1988 「岡山市津島の俗称『おつか』と称する前方後円墳に突いての調査の概略報告」『古代吉備』第10集 古代吉備研究会
- (16) 葛原克人 1991 「造山古墳とその時代」『岡山県史』第2巻 原始・古代Ⅰ
- (17) 高畑知功 1988 「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18

## 2 調査の経緯と概要

### 1) 経緯

岡山市立御野小学校地は、国指定史跡神宮寺山古墳に隣接して広がっている。現状では、校地は墳丘の一部を削り整地されている。校地造成時の掘削が、深い深度に及んでいないならば、この校地内に墳丘の一部あるいは末端施設が残存している可能性があると考えられていた。

また、神宮寺山古墳には『東備郡村誌』など江戸時代の文献以来、周溝が巡るとされてきた<sup>(1)</sup>。しかしながら、現状ではその存在を推しはかることができないほど、周辺の地形は改変されており、周溝存否の確証がとれない状況でもあった。

今回、御野小学校では、比較的古墳側に近い敷地において汚水処理槽並びに関連施設と北校舎の増築工事が実施されることとなった。そこで、岡山市教育委員会文化課（当時）は、古墳の墳端並びに周溝の存在が確認できるか否かを主眼として、御野小学校の校庭に試掘坑及びトレンチを設定



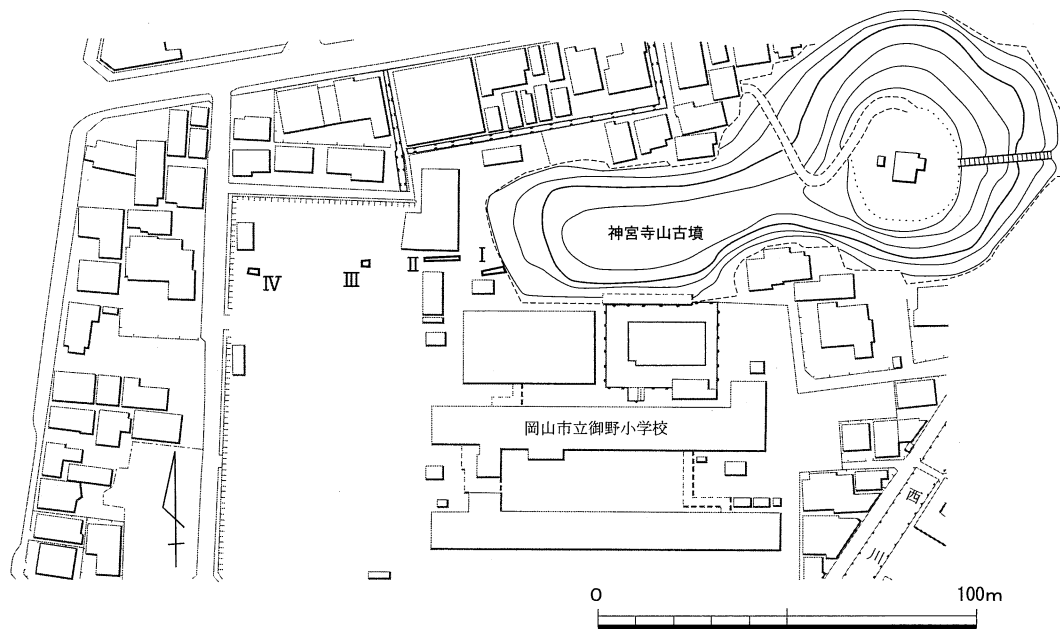
第5図 神宮寺山古墳とその周辺（アミ：史跡指定範囲）

して、土層の観察を主とした調査を実施した。調査は1983年10月22日から開始し、同年11月5日に全ての作業を終了した。延べ11日間であった。

作業日誌抄

- 1983年10月22日 作業開始
- 26日 平板測量（試掘坑の位置、境界杭、建物配置等の位置関係を測量する）
- 28日 試掘坑Ⅲ 土層柱状図実測、午後、岡山大学学生見学
- 31日 試掘坑Ⅰ平面図作成（葺石検出状況）
- 11月2日 試掘坑Ⅰ断面図実測開始
- 4日 試掘坑Ⅰ断面図作成・試掘坑Ⅱ断面図作成
- 5日 作業終了（延べ11日間）

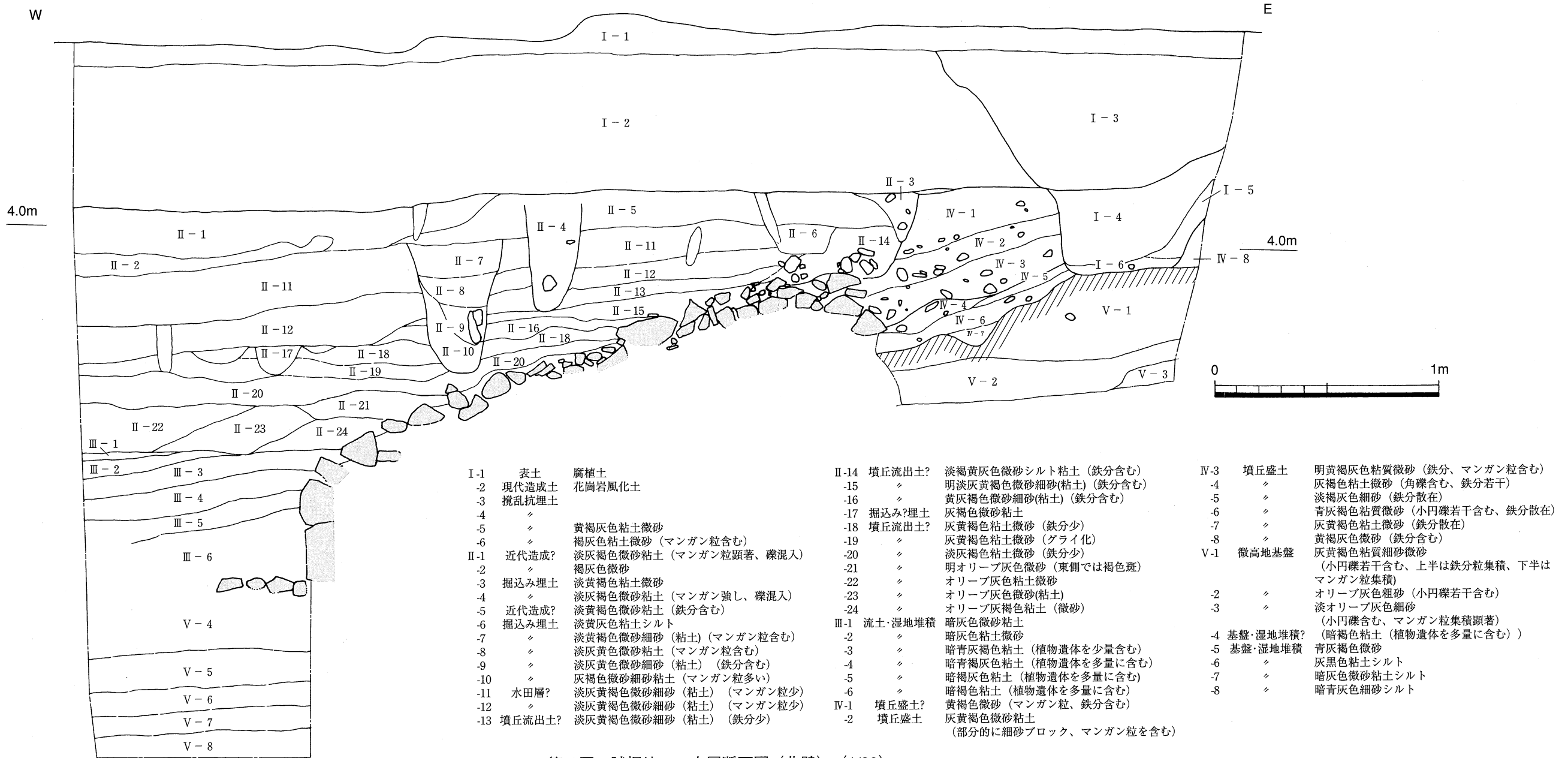
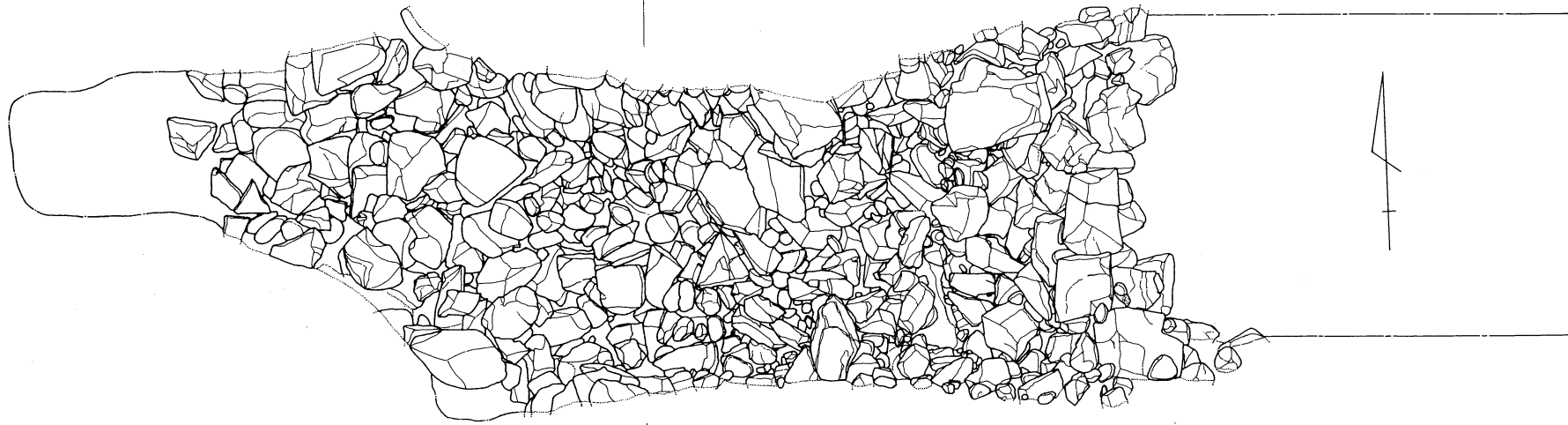
なお、試掘調査は神谷正義・乗岡実・西川雅紀（いずれも岡山市教育委員会文化課文化財保護主事・当時）が従事し、掘り下げ・実測・写真撮影等はそれぞれの分担部分を各自担当した。また、現地で作業のお手伝いをしていただいた、近藤真佐子さん、難波美佐子さん及びバックホー、水中ポンプ等を提供していただいた業者の方々にはひとかたならぬ御支援をたまわった。厚くお礼申し上げます。



第6図 試掘坑の配置 (1/2,000)

2) 調査の概要

調査は、トレンチ並びに試掘坑を4箇所設定（第6図）して進めた。試掘坑の位置は、調査の主眼が墳端の確認と周溝の存否ということであるので、その目的に沿って設定した。すなわち、墳丘に近接した場所、及びその延長線上に校庭端まで4本のトレンチ状の試掘坑を設定して、墳丘からの統一的な土層観察ができるように試みた。試掘坑は、墳丘側からⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳと呼ぶ。なお、



- |      |        |                         |       |         |                       |      |          |                               |
|------|--------|-------------------------|-------|---------|-----------------------|------|----------|-------------------------------|
| I-1  | 表土     | 腐植土                     | II-14 | 墳丘流出土?  | 淡褐黄灰色微砂シルト粘土 (鉄分含む)   | IV-3 | 墳丘盛土     | 明黄褐色粘質微砂 (鉄分、マンガン粒含む)         |
| -2   | 現代造成土  | 花崗岩風化土                  | -15   | 〃       | 明淡灰黄褐色微砂細砂(粘土) (鉄分含む) | -4   | 〃        | 灰褐色粘土微砂 (角礫含む、鉄分若干)           |
| -3   | 攪乱抗埋土  |                         | -16   | 〃       | 黄灰褐色微砂細砂(粘土) (鉄分含む)   | -5   | 〃        | 淡褐灰色細砂 (鉄分散在)                 |
| -4   | 〃      |                         | -17   | 掘込み?埋土  | 灰褐色微砂粘土               | -6   | 〃        | 青灰褐色粘質微砂 (小円礫若干含む、鉄分散在)       |
| -5   | 〃      | 黄褐色粘土微砂                 | -18   | 墳丘流出土?  | 灰黄褐色粘土微砂 (鉄分少)        | -7   | 〃        | 黄褐色粘土微砂 (鉄分散在)                |
| -6   | 〃      | 褐灰色粘土微砂 (マンガン粒含む)       | -19   | 〃       | 灰黄褐色粘土微砂 (グライ化)       | -8   | 〃        | 黄褐色微砂 (鉄分含む)                  |
| II-1 | 近代造成?  | 淡灰褐色微砂粘土 (マンガン粒顕著、礫混入)  | -20   | 〃       | 淡灰褐色粘土微砂 (鉄分少)        | V-1  | 微高地基盤    | 灰黄褐色粘質細砂微砂                    |
| -2   | 〃      | 褐灰色微砂                   | -21   | 〃       | 明オリブ灰色微砂 (東側では褐色斑)    |      |          | (小円礫若干含む、上半は鉄分粒集積、下半はマンガン粒集積) |
| -3   | 掘込み埋土  | 淡黄褐色粘土微砂                | -22   | 〃       | オリブ灰色粘土微砂             | -2   | 〃        | オリブ灰色粗砂 (小円礫若干含む)             |
| -4   | 〃      | 淡灰褐色微砂粘土 (マンガン強し、礫混入)   | -23   | 〃       | オリブ灰色微砂(粘土)           | -3   | 〃        | 淡オリブ灰色細砂                      |
| -5   | 近代造成?  | 淡黄褐色微砂粘土 (鉄分含む)         | -24   | 〃       | オリブ灰褐色粘土 (微砂)         |      |          | (小円礫含む、マンガン粒集積顕著)             |
| -6   | 掘込み埋土  | 淡黄灰色粘土シルト               | III-1 | 流土・湿地堆積 | 暗灰色微砂粘土               | -4   | 基盤・湿地堆積? | 暗褐色粘土 (植物遺体を多量に含む)            |
| -7   | 〃      | 淡黄褐色微砂細砂 (粘土) (マンガン粒含む) | -2    | 〃       | 暗灰色粘土微砂               | -5   | 基盤・湿地堆積  | 青褐色微砂                         |
| -8   | 〃      | 淡灰黄色微砂粘土 (マンガン粒含む)      | -3    | 〃       | 暗青灰褐色粘土 (植物遺体を少量含む)   | -6   | 〃        | 灰黒色粘土シルト                      |
| -9   | 〃      | 淡灰黄色微砂細砂 (粘土) (鉄分含む)    | -4    | 〃       | 暗青褐色粘土 (植物遺体を多量に含む)   | -7   | 〃        | 暗灰色微砂粘土シルト                    |
| -10  | 〃      | 灰褐色微砂細砂粘土 (マンガン粒多い)     | -5    | 〃       | 暗褐色粘土 (植物遺体を多量に含む)    | -8   | 〃        | 暗青灰色細砂シルト                     |
| -11  | 水田層?   | 淡灰黄褐色微砂細砂 (粘土) (マンガン粒少) | -6    | 〃       | 暗褐色粘土 (植物遺体を多量に含む)    |      |          |                               |
| -12  | 〃      | 淡灰黄褐色微砂細砂 (粘土) (マンガン粒少) | IV-1  | 墳丘盛土?   | 黄褐色微砂 (マンガン粒、鉄分含む)    | -2   | 墳丘盛土     | 灰黄褐色微砂粘土                      |
| -13  | 墳丘流出土? | 淡灰黄褐色微砂細砂 (粘土) (鉄分少)    |       |         | (部分的に細砂ブロック、マンガン粒を含む) |      |          |                               |

第7図 試掘坑I・土層断面図(北壁) (1/20)

限られた調査環境での調査であったことや、調査後20年以上が経過し今日的な視点で見るといくつかの疑問点などがあるが、ここでは調査時の所見に従って記述していくこととし、その再検討は第IV章に譲ることとする。

#### a. 試掘坑Ⅰ（第7図）

学校敷地内で最も古墳墳丘に近い個所に、試掘坑Ⅰ（幅約2m、長さ約10mのトレンチ）を設定した。試掘坑は、造成土が厚いことを予想し小型のバックホーで掘削を始めていったが、掘削を開始した直後、表土・造成土層下から円礫及び角礫が密集して検出された。当初、造成土層内の礫と区別がつかず、礫群の一部を掘り下げたが、礫の範囲が広がるに及び、古墳の葺石である可能性を考え、バックホーでの掘削は礫群上面で止め、あとは手掘り作業で、トレンチ内の礫の露出に努めた。

礫群は拳大ないし人頭大の大きさの角礫及び河原円礫と花崗岩礫とが混在して密集しており、神宮寺山古墳の葺石である可能性が高い。概略、人頭大の角礫が優先しているようであり、若干の花崗岩礫そして円礫が混じる。石材は、同定していないため不明とせざるを得ないが、周辺の山頂部などに分布する砂岩・砂質片岩質の古成層岩や、旭川河床や第3紀層とみられる「山砂利層」<sup>やまじりそう</sup>でよく見られるヒン岩・石英斑岩質の円礫とみられる。葺石は墳端周辺は角礫が顕著になり、末端部分では角礫をほぼ垂直に、外方側に面を意識して2～3段積んでおり、墳丘端を意識しかつ崩落防止を意図して築成していたと想定できる状況であった。墳丘斜面は、トレンチ幅が狭いこともあり、石積みの単位等を認めることはできなかったが、敢えて指摘するならば、角礫が2～3m間隔で据えられ、その間を小礫で充填しているようにも観察された。また、墳丘上方は、一部葺石をバックホーで掘削してしまったため十分に観察できなかったが、土層断面にも角礫が埋もれている様相が認められず、大部分は円礫を葺いただけの可能性はある。

その末端から外域にかけての土層（第7図）は、下部堆積層（Ⅲ-4～6層）に有機質が認められ湿地状況であることが確認できた。また、その埋土には、墳丘上から崩落したと思われる埴輪片が出土している。おそらく古墳築造時の土層は30層以下で、それ以上は葺石を埋めてもおり、後世の堆積土であろう。

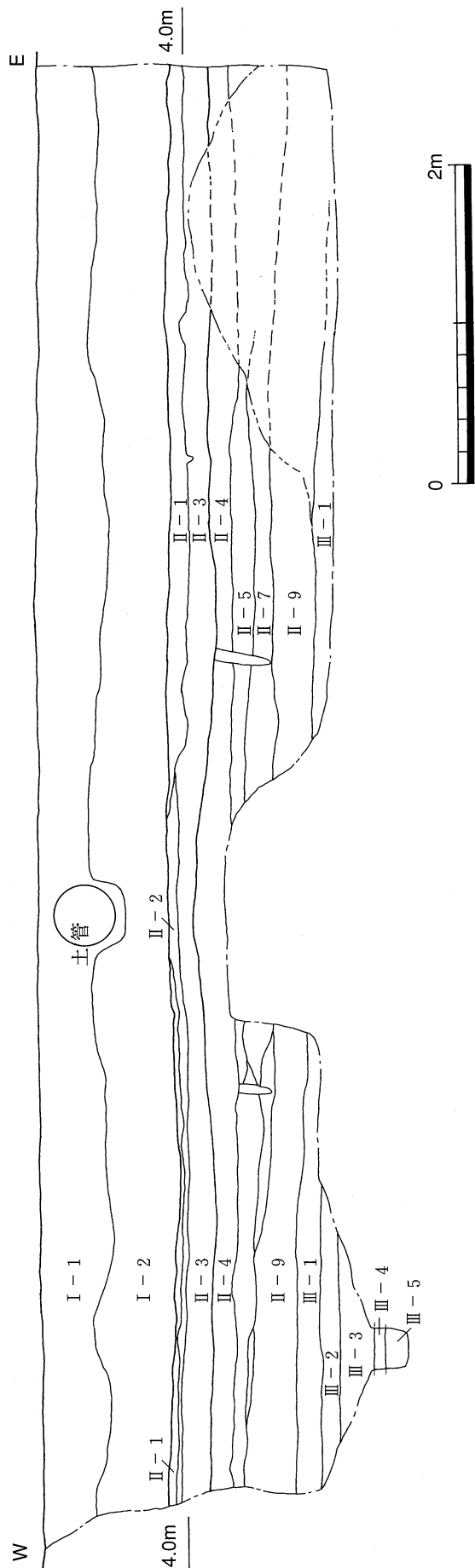
墳丘盛土は、葺石と同様の傾斜で堆積しているⅣ-2～6層が確実である。Ⅳ-1層は一部攪乱再堆積層を含むであろうが、盛土の可能性はある。Ⅴ-1～3層は微高地基盤土と判断している。

なお、Ⅲ-6層、Ⅴ-4層で確認される礫は、葺石の落石と思われる。一時期の表土層レベルに対応しよう。なお、Ⅴ-5～8層は、検土杖（ボーリングステッキ）による探査結果である。

#### b. 試掘坑Ⅱ（第8図）

試掘坑Ⅰから5mほど西方に、長さ4.5mほど、幅1mほどのトレンチを設定して掘削した。土層堆積は、0.8mほどが学校用地造成土であり、Ⅱ-9層で有機質等を含み、その下層では粘質が強くなるなど、湿地状況を示す。また、Ⅲ-4層では植物遺体、有機質の含有が顕著になり、明らかに湿地ないし泥地状況を示している。このトレンチの東側壁、すなわち古墳側が大きく崩壊したのも、その下部層が軟弱であることが一因している。この状況は、『東備郡村誌』の「陵下の廻り平地低し」とする状況や、古くから住む人が前方部側には蓮田が存在していたとする発言とも一致する。

この試掘坑Ⅱの土層は、整然と水平堆積状況を示しており、一貫して低湿地の状況であったと思われる。なお、試掘坑ⅠのⅢ-4層が、試掘坑ⅡのⅢ-4層に対応するとみられる。



- |       |        |                         |
|-------|--------|-------------------------|
| I-1   | 現代造成土  | 花崗岩風化土 (コンクリート片等含む)     |
| -2    | 近代造成土  | 黒褐色粘土微砂 (礫、ガラス片、レンガ他含む) |
| II-1  | 水田層    | 青灰褐色微砂粘土                |
| -2    | 〃      | 褐灰色微砂粘土 (マンガン顕著)        |
| -3    | 〃      | 灰(黄)褐色微砂粘土 (マンガン含む)     |
| -4    | 水田・低湿地 | 褐灰色微砂粘土                 |
| -5    | 〃      | 黄褐色微砂細砂                 |
| -6    | 〃      | 黄褐色微砂粘土                 |
| -7    | 水田・低湿地 | 青灰黄褐色微砂細砂               |
| -8    | 〃      | 青灰(黄)褐色微砂粘土             |
| -9    | 〃      | 青灰(黄)褐色微砂粘土 (有機質の細粒を含む) |
| III-1 | 低湿地堆積  | オリープ灰色粘土 (有機質の細粒を含む)    |
| -2    | 〃      | オリープ灰色粘土                |
| -3    | 〃      | (暗)オリープ灰色粘土             |
| -4    | 〃      | 暗灰褐色粘土 (植物遺体を疎らに含む)     |
| -5    | 〃      | 暗赤褐色植物遺体・粘土層            |

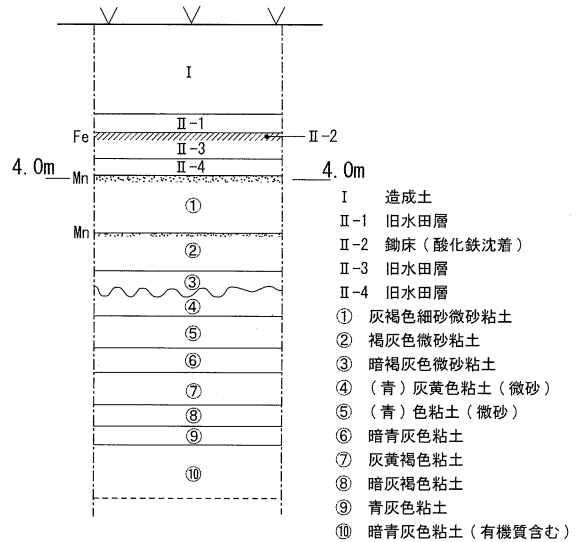
第8図 試掘坑II断面図(北壁) (1/40)



c. 試掘坑Ⅲ（第9図）

試掘坑Ⅲは、試掘坑Ⅱからさらに西方へ14mほど離れた場所に設定した。ほぼ校庭の中央部分にあたる。約2m四方を掘削し、土層観察を実施した。

試掘坑Ⅲは試掘坑Ⅱとほぼ同様の土層堆積を示す。しかし、有機質を含む土層（10層）が、若干深めに検出される傾向が認められるようで、土層堆積そのものが西方に傾斜して形成されている可能性がある。この状況は、微高地周辺の微低地の堆積状況あるいは低地に移行する土地での堆積状況を示していると思われる。



第9図 試掘坑Ⅲ土層柱状図（1/40）

d. 試掘坑Ⅳ

試掘坑Ⅳは、試掘坑Ⅲからさらに西方へ27m離れた場所に設定した。校庭の西端にあたる。今回、試掘可能域の最西端にあたるため、設定した。上層部はアスガラが廃棄されており、これが崩落するなどしたため土層図の作成は出来ていない。掘削時の観察では、下部層は粘質土の堆積であり、試掘坑Ⅱ、Ⅲとほぼ同様の堆積状況とみられる。

3) 小結

神宮寺山古墳は、古くから大型の前方後円墳として知られ、1961年には後円部で副室が露呈し多量の鉄製品が出土した<sup>(2)</sup>。しかし、墳丘はすでに神社や墓地、そして学校敷地等で大きく変形されており、正確な墳丘形状・規模等が求められる条件になかった。今回きわめて部分的ながら墳丘端の一端を捉えることが出来たことは大きな成果である。

そして、神宮寺山古墳は、後世にその墳丘上あるいは墳丘裾部に神社・墓地・学校地が設置ないし造成され、大幅に形状の改変が為されてきたが、少なくとも墳端に関しては、調査次第では探求が可能な状況との見通しが得られた。それは、やはり平成12年の隣接した宅地における立会調査の成果<sup>(3)</sup>でも同様のことが言える。

今回の墳端の位置から判断して、神宮寺山古墳の墳丘規模は約155mほどと見られる。また、調査主眼の一つであった周溝の有無については、明確な判断材料を得ることが出来なかった。試掘坑Ⅰでは墳丘外は湿地堆積土層を示しており、しかも有機質や埴輪片も流入する条件下にあったことは確かである。しかし、試掘坑Ⅱ・Ⅲ・Ⅳも土層の堆積はほぼ同様の状況を示している。また古墳から離れるにつれ、有機質含有土の高さが減じる状況は、微高地周辺に広がる低湿地の状況と判断できる。

永山卯三郎は、神宮寺山古墳北側から西側を直角に折れつつ流れる用水路を周溝の外限界とし、前方部前端で周溝の幅を90尺-約30mとする<sup>(4)</sup>。この用水路の延長部分はほぼ試掘坑Ⅱの西端付近にあたるが、今回の調査では周溝の外限界を示すような遺構、土層は観察できなかった。あるいは、トレンチ間に周堤等が存在する可能性も残されるが、試掘坑Ⅱ～Ⅲの状況は西側に緩やかに傾斜していく状況であり、ある程度限られた幅の周溝内の状況とはとらえがたい。また、校庭の外側に外限界を求めた場合、周溝の幅は70mを超えることとなり、その規模からも、北側50mの住宅地で微高地が確認されていることなどからも、あまり現実的な発想とは言えない。

ここでは、周溝の存否に関しては決定的な資料は得られなかったとし、むしろ神宮寺山古墳が微

高地端に形成され、前面に湿潤地が広がる環境下にあったことが判明した、とする。

大型の前方後円墳が、このような沖積地に築造されている例はほとんどない。神宮寺山古墳が前面に湿潤地が広がる微高地端に敢えて築造したとすれば、特異な存在と言えるであろう。かつて西川宏が提示した旭川の東西両岸平野統合が神宮寺山古墳のころ達成されたとの評価<sup>(5)</sup>は、各古墳の編年観の修正によりもはやそのまま受け入れることは出来ないが、こうした築造に適さない地に造られた古墳の評価として魅力的である。東岸平野のように丘陵部に大型前方後円墳築造が可能な適地がないことも一因であろうが、この地点は、東西両岸平野のほぼ中央であると同時に、旭川と現在の西川・観音寺用水などに名残のあるその分流との分岐点付近にも当たっており、こうした水利上重要な地点をおさえる意図があったとも思える。

---

#### 註

- (1) 永山卯三郎 1936「神宮寺古墳」『岡山市史』第一
- (2) 鎌木義昌 1962「神宮寺山古墳」『岡山市史』古代編
- (3) 宇垣匡雅・乗岡実2002「神宮寺山古墳」『岡山市埋蔵文化財センター年報』2000（平成12）年度 岡山市教育委員会
- (4) 註（1）文献
- (5) 西川 宏 1975『吉備の国』古代の国々－5 学生社

### 3 出土遺物

出土遺物はその大半が埴輪片であるが、弥生土器等も若干含まれるようである。小片が多く、量も多くない。うち主なものを第10図に示した。

#### 1) 出土遺物とその特徴

1、2は内外面とも縦方向～横方向の粗いハケメ（4本/cm）で、1は内面のハケメを撫で消している。1は不自然なまでに高いタガをもつ破片であり、上方向にやや広がるような形態のものと思われる。粗いハケメは一次調整とみられ、ハケメが直接タガ下に潜り込んでいるのが観察できる。形態などからも円筒埴輪とは考えにくく、朝顔形埴輪の肩部と筒部の境、あるいは壺形埴輪の基部などの破片と思われる。

3～5は円筒埴輪の破片と思われる。調整は外面がタテハケ、内面が斜め方向のハケメの後ハケメを撫で消している。ハケメの密度は内外面とも6本/cmを測る。3、4には円形(?)の透かし孔が存在する。5は基底部の破片である。6も円筒埴輪の破片としたが、タガの接合法、調整、胎土、色調など3～5と異なっており形象埴輪などの可能性もある。タガは下半部に径0.8cm程度の粘土紐を貼り付け、その上に薄く粘土を被せ形を整えている。調整は内外面ともナデ、胎土は3mm大の比較的大きな石英の砂粒が目立つ。

7はやや内湾した薄手の破片で、外面には横方向のハケメを施す。外面に赤色顔料が塗布されており、壺形埴輪、朝顔形埴輪などの肩部の破片と思われる。

8～10はナデを主体とする調整、胎土、色調など3～5の円筒埴輪と異なっており、6の破片との類似も指摘できる。形態はわからないが、形象埴輪の破片である可能性がある。8は外面に10本/cmのやや細かいタテハケの後横方向のナデ、内面にハケメの後ナデが施されている。9は外面がナデと思われ、内面が斜め方向のハケメの後ナデを施す。10は外面にナデ、内面に凹凸が残る強いナデが施される。

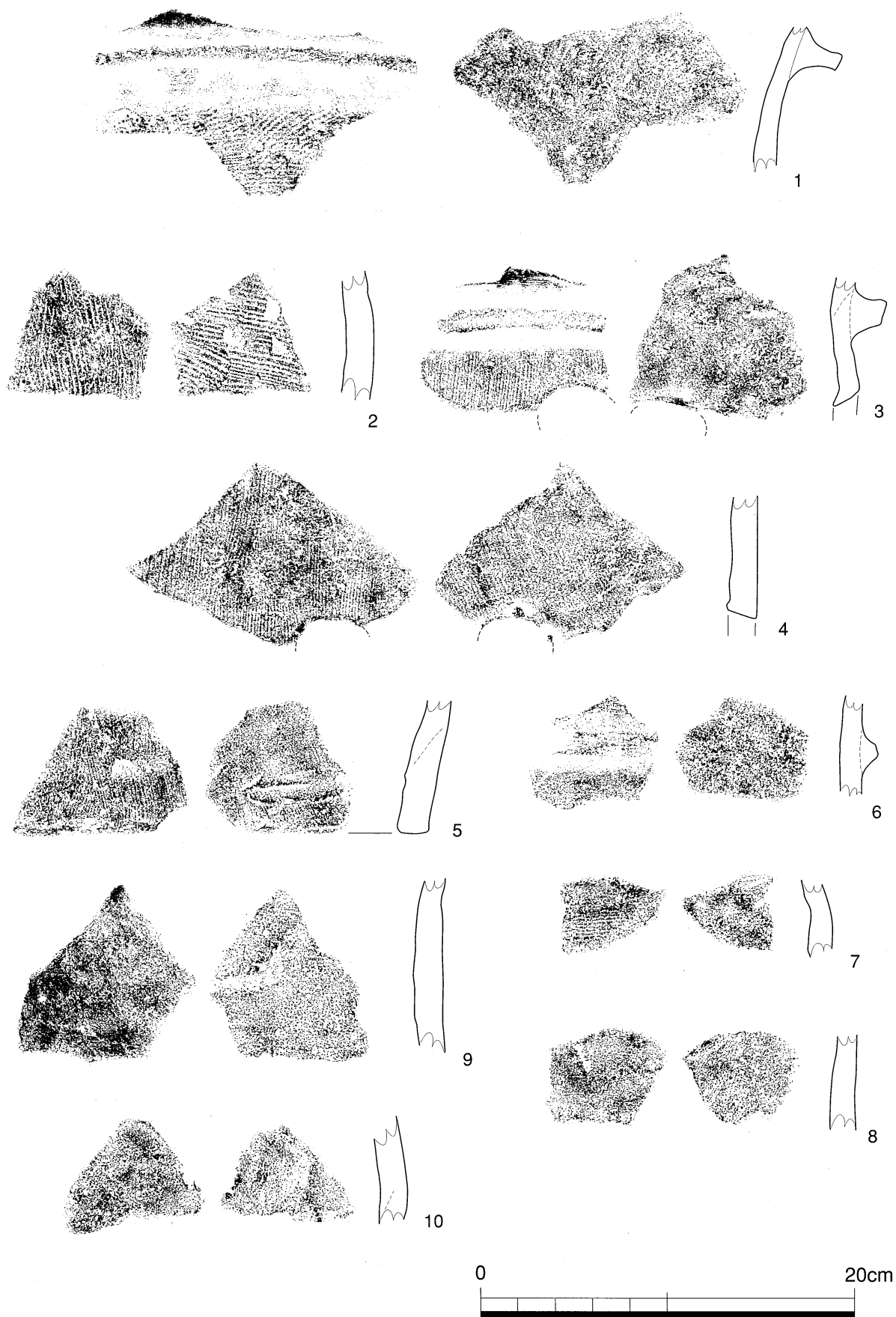
胎土は1～5、7と6、8～10とでは大きく異なる。1～5、7では1～3mm大の灰白色粘土塊を含むことが特徴的であり、全体に砂質の強い印象をうける。6、8～10にはこの灰白色粘土塊は含まれておらず、砂粒は多く含まれているものの全体的には肌理の細かい印象を受ける。6、9は先述のように3mm大の石英粒が目立ち、赤橙色粒も僅かながら含まれるなど、8、10とも若干異なるようである。8、10は1～3mm大の石英、長石粒を多量に含んでいる。

焼成は1～5、7は軟質で、色調は灰白色～灰黄褐色を呈する。1、3～5には黒斑が認められる。それに対し6、8～10はやや赤みを帯びた色調を呈している。

なお、ごく小片だが弥生土器と思われる破片がわずかに存在する。多くは器種や部位も不明だが、弥生中期末～後期の口縁端部の拡張する甕の口縁部受部や、丁寧な内面ヘラケズリで外面に細かいハケメを施した、弥生時代後期～古墳時代初頭の甕などの胴部破片と思われるものが存在する。

#### 2) 小結

神宮寺山古墳出土の埴輪は春成秀爾により15片が公表されている<sup>(1)</sup>が、今回の出土品もそれと同様の特徴をもつものである。外面の調整はタテハケを主体とするもので、二次調整にヨコハケを施すものはごくわずかであり、かつ円筒埴輪以外の器種と思われる。透かし孔は少なくとも、長方形と円形があるようである。それでは、これらの埴輪の位置付け、ひいては神宮寺山古墳の時期はどう位置付けられるのであろうか。特に、これまでも対比されることが多かった、金蔵山古墳<sup>(2)</sup>との関係が問題となる。



第10図 神宮寺山古墳出土埴輪 (1/3)

表1 神宮寺山古墳出土埴輪観察表

番号	器種	部位	法量等	調整等の特徴	胎土	色調
1	壺形埴輪?	基部?	タガ(上底) 0.9 (下底) 3.0 (高さ) 2.3	かなり高いタガを伴う破片。上方にやや開く。 外面: 横~斜め方向のハケメ(4本/cm)。タガ周辺ナデ、タガ下面に指頭圧痕。黒斑あり 内面: 斜め方向のハケメ(4本/cm)の後ナデ。	1mm以下の石英、長石粒を多く含む。2~3mm大の灰白色粘土塊をまばらに含む。	外面: 2.5Y8/2(灰白) ~2.5YR8/1(灰白) 内面: 2.5Y7/2(灰黄)
2	〃	〃	-	1と同一個体か? 外面: 縦~斜め方向のハケメ(4本/cm)。 内面: 横~斜め方向のハケメ(4本/cm)	1mm以下の石英、長石粒を多量に、1~3mm大の灰白色粘土塊をまばらに含む。	外面: 10YR6/2(灰黄褐) 内面: 10YR6/1(褐灰) ~10YR6/2(灰黄褐)
3	円筒埴輪	筒部	タガ(上底) 1.4 (下底) 2.8 (高さ) 2.0	高い断面台形のタガ、円形?透かし孔を伴う破片。 外面: タテハケ(6本/cm)、タガ周辺ヨコナデ。黒斑あり。 内面: 斜め方向のハケメ(6本/cm)の後ナデ	1mm以下の長石、石英粒を含む。2~3mm大の赤褐色粒をまばらに、灰白色粘土塊をやや多く含む。	外面: 10YR6/2(灰黄褐) ~2.5Y6/1(黄灰) 内面: 10YR5/4(にぶい黄褐) ~10YR7/1(灰白)
4	〃	〃	-	円形?透かし孔を伴う破片。 外面: タテハケ(6本/cm)。黒斑あり。 内面: 斜め方向のハケメ(6本?/cm)の後ナデ。	1mm以下の長石、石英粒を多く、1~3mm大の灰白色粘土塊をやや多く、赤褐色粒をまばらに含む。	外面: 10YR7/2(にぶい黄橙) ~10YR6/1(褐灰) 内面: 10YR7/2(にぶい黄橙)
5	〃	基底部	-	基底部の破片。 外面: タテハケ(6本/cm)。黒斑あり。 内面: 斜め~縦方向のハケメ(6本?/cm)の後ナデ。	1mm以下~2mm大の長石、石英粒を多量に、1~3mm大の灰白色粘土塊をまばらに含む。	外面: 10YR6/2(灰黄褐) 内面: 10YR7/2(にぶい黄橙)
6	〃?	筒部?	タガ(上底) 0.7 (下底) 2.7 (高さ) 1.0	やや小振りなタガ周辺の破片。 外面: タガ周辺ナデ 内面: ナデ?	1mm以下の長石粒、1~3mm大の石英粒を多く含む。1~3mm大の赤褐色粒をまばらに含む。	外面: 7.5YR8/3(浅黄橙) ~10YR7/1(灰白) 内面: 10YR8/2(灰白) ~10YR7/1(灰白)
7	形象埴輪?	-	-	外面: 横方向のハケメ(7本/cm)。外面に赤色顔料残存 内面: ナデ?	1mm以下の長石粒を多く含む。1~3mm大の灰白色粘土塊を含む。	外面: 10YR6/1(褐灰) 内面: 10YR7/3(にぶい黄橙)
8	〃	-	-	外面: タテハケ(10本/cm)の後横方向のナデ。 内面: ハケメの後?ナデ。	1mm以下~3mm大の石英、長石粒を多量に含む。	外面: 2.5Y7/1(灰白) ~2.5Y6/1(黄灰) 内面: 10YR7/2(にぶい黄橙)
9	〃	-	-	外面: ナデ。 内面: 斜め方向のハケメの後ナデ。	1~3mm大の石英、長石粒を多量に含む。	外面: 10YR7/3(にぶい橙) 内面: 10YR8/3(浅黄橙)
10	〃	-	-	外面: ナデ? 内面: 強いナデ?	1~2mm大の石英、長石粒を多量に含む。	外面: 7.5YR8/2(灰白) 内面: 5YR8/4(淡橙) ~5YR7/3(にぶい橙)

金蔵山古墳の埴輪は中央石室の埋葬に伴うもの(中央区画)と南石室の埋葬に伴うもの(南区画)で、器種、調整、焼成、盾等の文様など異なっており、前者が古く、後者が新しく位置付けられる。中央区画に伴う埴輪は円筒埴輪のほか盾、蓋、短甲<sup>きぬさ たんこう</sup>などがある。調整はタテハケを中心とするものであり、川西編年Ⅱ期後半、10期編年の4期に位置付けられる。蓋形埴輪も松木武彦の蓋形埴輪の編年<sup>(4)</sup>に従えば、津堂城山タイプ(古相)に属するものと思われ、短甲形埴輪も長方板革綴短甲<sup>ちやうほういたかわとじたんこう</sup>を模したものである。平成12年に調査<sup>(3)</sup>した後円部墳丘端部の円筒埴輪は、外面にタテハケを施し、半円形、円形の透かし孔をもつなど、中央石室に伴うものと同じ特徴をもつ。一方、南区画の埴輪には円筒、盾、蓋、短甲、家、水鳥などがある。B種ヨコハケが施されており、蓋形埴輪も松木編年の津堂城山タイプ(新相)に属し、短甲も三角板革綴短甲を模したものである。川西編年Ⅲ期、10期編年の5期に位置付けられる。

神宮寺山古墳の埴輪資料はこれまで知られているものをあわせてもきわめて断片的であり、なおかつ岡山県下の古墳時代前期の埴輪資料もごく限られている。これまでの研究では、春成は神宮寺山古墳の埴輪の特徴-縦刷毛主体、透かし孔が長方形、丹塗りのものが多い-から、川西編年のⅠ期、4世紀の中頃を前後する時期に位置付けている<sup>(5)</sup>。神宮寺山古墳の埴輪は春成が指摘するように、タテハケ主体で赤色顔料を塗布したのも目立つが、今回の出土埴輪にみるように円形の透かし孔が存在しており、川西編年Ⅱ期に下るものと思われる。金蔵山古墳との関係に関しては、金蔵山古墳においても中央石室に伴う埴輪群のように、タテハケ、長方形透かし孔、赤色顔料の個体が存在しており、現状では金蔵山古墳より新しくなることはないと思われるという程度である。したがって、神宮寺山古墳の編年的位置も10期編年の3~4期としておかざるを得ないであろう。

註

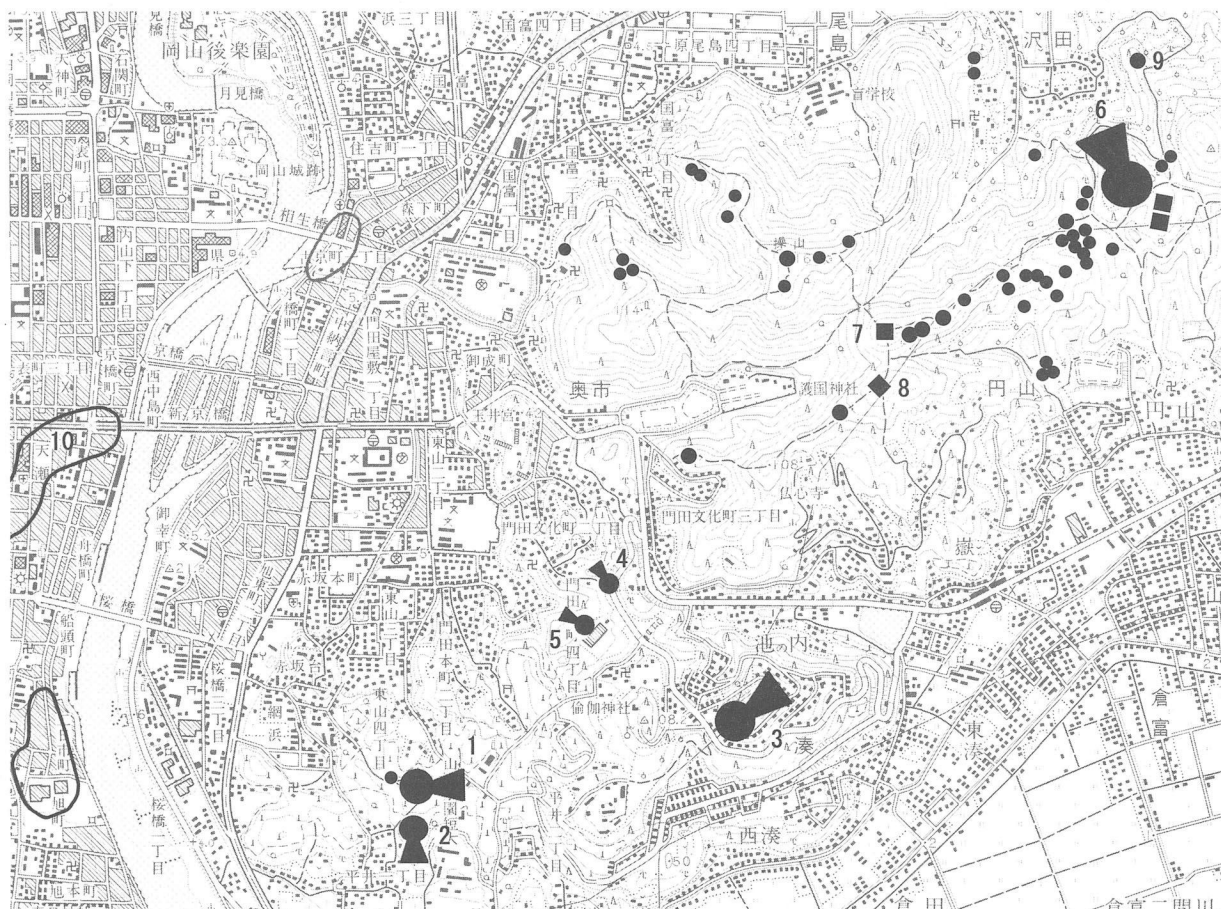
- (1) 春成秀爾 1982「備前の大形古墳の再検討」『古代吉備の検討』古代を考える 31
- (2) 鎌木義昌・西谷真治 1959『金蔵山古墳』倉敷考古館
- (3) 宇垣匡雅・乗岡実 2000「金蔵山古墳」『岡山市埋蔵文化財センター年報1』岡山市教育委員会
- (4) 松木武彦 1994「吉備の蓋形埴輪-器財埴輪の地域性研究に関する予察-」『古代吉備』第16集
- (5) 註(1)文献

## 第三章 網浜茶臼山古墳

### 1 網浜茶臼山古墳の位置と周辺

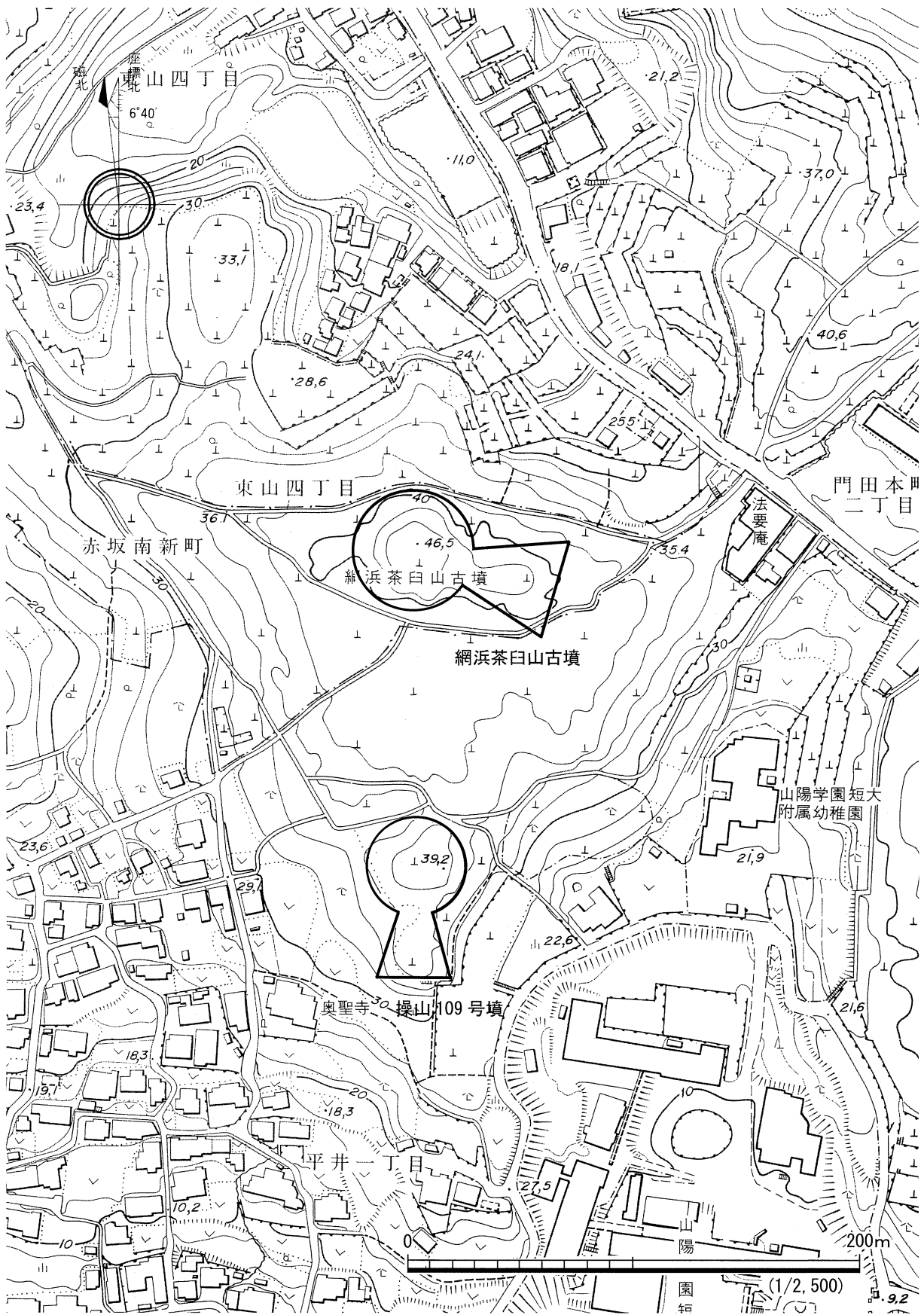
網浜茶臼山古墳は岡山市街の東に横たわる操山山塊の西南部、岡山市赤坂南新町に所在する。当古墳の所在する操山山塊は東西約5km、南北約3kmの独立山塊で、標高100m以上の山並みが東西に並んでいる。この山塊は門田文化町付近の谷部を境に北東側は標高169mの操山を最高に比較的急峻な山並みを形作るのに対し、南西側では標高20~60m程度の比較的平坦な丘陵となっており、網浜茶臼山古墳はそのもっとも平野側に突き出した標高40m程度の比較的低い山頂部に位置する。古墳からは岡山市街やその南側の干拓地、児島湾、児島半島を一望できる。古墳周辺は、近世以降岡山城下の墓地として発達してきた東山墓地であり、現在約23haにわたり近世~現代の墓地が密集している。

網浜茶臼山古墳は前方部を東に向けた前方後円墳で、墳丘全体が墓地となっており一見して古墳であることも分からないほどに改変されている。



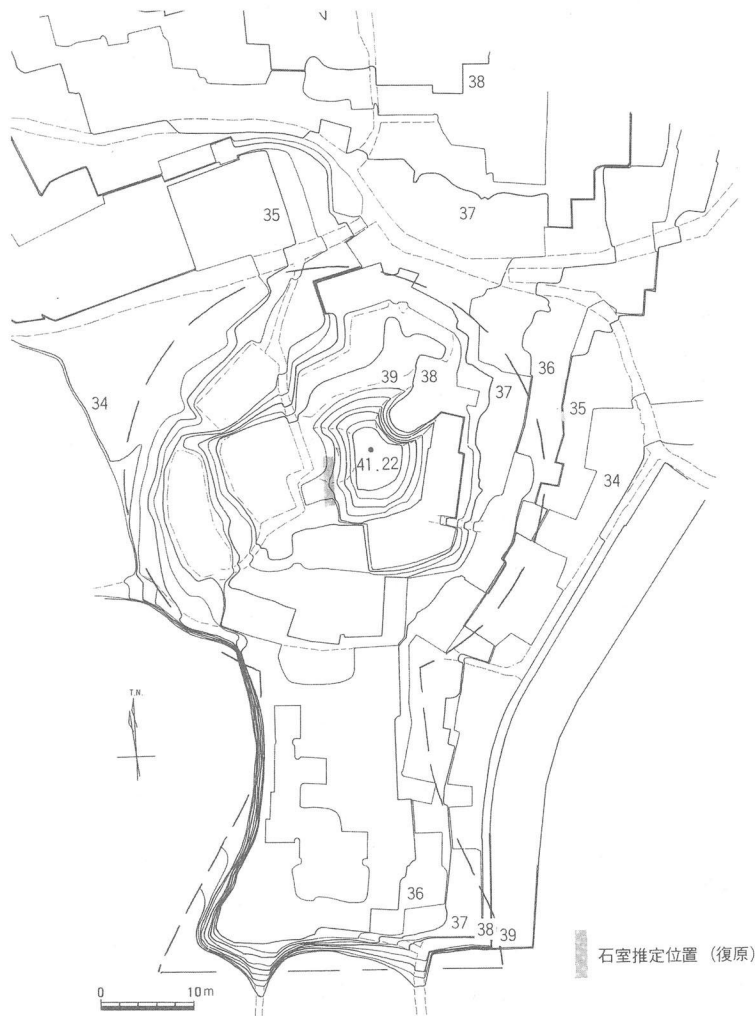
第11図 網浜茶臼山古墳と周辺の遺跡 (1/25,000)

- 1 網浜茶臼山古墳 2 操山109号墳 3 湊茶臼山古墳 4 操山103号墳 5 操山106号墳 6 金蔵山古墳  
7 護国神社裏山古墳 8 旗振台古墳 9 沢田大塚古墳 10 天瀬遺跡



第12図 網浜茶臼山古墳と操山109号墳

古くは、1930年刊行の『岡山県通史』上編に「網ノ浜丘上古墳」として記されている<sup>(1)</sup>。1965年刊行の『操山史学』14では、墳名を「瓦山」として全長83mの前方後円墳と報告されている<sup>(2)</sup>。発掘調査などは実施されていないが、宇垣匡雅氏らによって測量調査が実施されており、近接する操山109号墳とともに詳細な報告がなされている<sup>(3)</sup>。それによると規模は墳長92m、後円部径56.5



第13図 操山109号墳墳丘測量図 (1/800・註2文献より)



第14図 操山109号墳 (前方部から)

m、同高さ8m、前方部高さ4.5mで、前方部はバチ形になる可能性がある。主体部は板石積みの<sup>たてあなしせっかく</sup>竪穴式石槨と思われ、墓地の石垣などに石槨石材と思われる安山岩の板石が散見される。また、後円部南裾部には天井石と思われる大形の板石が遺存していたというが、調査時には確認できなかった。また、墳丘には10~20cm大の円礫、10~30cm大の角礫・<sup>ふきいし</sup>亜角礫が多数認められ、<sup>とくしゅつぼがたはにわ</sup>葺石の石材と思われる。副葬品などは知られていないが、<sup>とくしゅつぼがたはにわ</sup>特殊器台形埴輪、<sup>とくしゅつぼがたはにわ</sup>特殊壺形埴輪を伴っている。特殊器台形埴輪の文様帯文様は都月a類とその変異形といわれ、同じく特殊器台形埴輪、特殊壺形埴輪を伴い、都月a類文様以外の文様とされる操山109号墳より新しく位置付けられている。

また周辺には、操山109号墳をはじめ、操山103号墳、操山106号墳、<sup>みなとちやうすやま</sup>湊茶白山古墳の前方後円墳が存在する。

操山109号墳は網浜茶白山古墳の南90mの尾根上に位置する前方後円墳であり、前方部を南に向けている。規模は墳長76mに推定されており、後円部中央付近に石室の構造の一部とみられる板石の集積が露出している。先に述べたように特殊器台形埴輪を伴っており、網浜茶白山古墳に先行する位置付けがなされている。また、操山109号



墳の主軸の延長線上に網浜茶臼山古墳が築造された可能性が指摘されている<sup>(4)</sup>。

操山103号墳<sup>(5)</sup>は網浜茶臼山古墳の北東約900mの尾根上にある前方後円墳で、墳長32m、前方部を平野側の北西に向けている。遺物等は知られておらず時期も不明である。

操山106号墳は網浜茶臼山古墳の北東約700mの尾根上に立地する前方後円墳である。墳丘はほとんど流失してしまっているが、墳長41mと推定されており、前方部を平野側の北西に向けている。やはり遺物、時期などは不明である。

湊茶臼山古墳は網浜茶臼山古墳の東約1kmの標高100mほどの山頂部に立地する。墳長約130mを測る大型の前方後円墳で、前方部を北東に向けている。墳丘には葺石とみられる角礫が認められる。円筒埴輪、朝顔形埴輪などが知られており、その特徴から、網浜茶臼山古墳に後続する四世紀後半頃の築造と推定されている<sup>(6)</sup>。

なお、網浜茶臼山古墳と操山106号墳の間の尾根には大形前方後円墳がかつて存在したといわれるが<sup>(7)</sup>、現状では確認できない。また『岡山市埋蔵文化財分布地図』には網浜茶臼山古墳に隣接して操山110号墳の記載があるが、宇垣匡雅の指摘するように網浜茶臼山古墳の築造にともない取り残された残丘である可能性が高い<sup>(8)</sup>。

---

#### 註

- (1) 永山卯三郎 1930 『岡山縣通史』上編  
なお、『岡山縣通史』では、操山109号墳とみられる古墳を「茶臼山古墳」としている。
- (2) 岡山県立岡山操山高等学校歴史研究部 1965 『操山史学』
- (3) 宇垣匡雅 1990 「網浜茶臼山古墳・操山109号墳の測量調査1 - 吉備の前期古墳Ⅲ -」『古代吉備』12集 古代吉備研究会
- (4) 註(3) 文献
- (5) 草原孝典 2002 「第1章 位置と環境」『新道遺跡 - 備前国鹿田庄関連遺跡の発掘調査 -』岡山市教育委員会
- (6) 春成秀爾 1982 「備前の大形古墳の再検討」『古代吉備の検討』古代を考える 31  
近藤義郎 1986 「112 湊茶臼山古墳」『岡山県史』考古資料 岡山県
- (7) 出宮徳尚 1975 「第一章 歴史的環境」『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団、註11
- (8) 註(3) 文献

## 2 調査の経過と概要

### 1) 調査の経緯と経過

#### a. 調査の経緯

東山墓地における無縁墓の改葬事業が網浜茶白山古墳上に存在する墓地にも及ぶこととなり、平成5年12月20日付け岡環衛第146号で岡山市長 安宅敬祐（当時）から文化庁長官あて文化財保護法第57条の3の「通知」が提出された。これをうけ、主幹課である岡山市環境衛生課と教育委員会文化課（当時）の間でその保存方について協議を行った。

網浜茶白山古墳は墓地の造成などによって既に原形をとどめないまでに改変されており、当然、対象となる無縁墓も既に造成、攪乱かくらんされた部分である。そのため、今回のような墓地それも既掘ほこの墓壙を対象とするような工事であれば、古墳の残存部分や遺構、および古墳の景観に影響がほとんど及ばないと考えられた。しかし、網浜茶白山古墳はこうした墓地による造成部分に埴輪や葺石ふんきゅうがいひょうしせつが存在することが報告されており、今回の工事においてもそういった埴輪、葺石などの墳丘外表施設、主体部の構造体、副葬品などが出土する可能性が考えられた。

以上の状況をふまえ、工事の施工に際しては当教育委員会文化課職員の立ち会いのうえ実施することとし、古墳への影響が軽微であること、立会調査対応とすることを意見として付し、平成5年12月22日付け岡市教委文第542号で岡山県教育委員会教育長あてに「通知」を進達した。

#### b. 調査の方法と経過

無縁墓改葬に伴う立会調査は平成6年3月2日から同年3月11日にかけて実施した。調査は当教育委員会文化課主任（当時）神谷正義、同文化財保護主事 安川満が対応した。無縁墓の改葬は対象の墓地、遺骨等が存在すると予想される墓石等の下をバックホーで掘削し、遺骨等を墓地、墓石ごとに回収するという方法で行われ、立会調査もそのつど掘削部分を観察、必要に応じて記録するという方法で行った。それぞれの掘削は小規模ながら、掘削部分は古墳のほぼ全域にわたり、墳丘外と思われる地点についても特に墳丘裾付近の改変の著しい前方部北側については立会調査を実施した。

### 2) 調査の概要

本古墳は現状でも古墳かどうか確認できないほどに改変されており、特に後円部南側～西側斜面は墓地の造成が著しい。一方、後円部墳頂、前方部墳頂は緩やかな起伏のある平坦面になっており、比較的本来の状況を残しているように見える。

改葬対象の掘削部分は古墳墳丘内、墳丘周辺部とは言え、いずれも近世～現代の墓壙内というばかりでなく墓地の造成による改変が予想以上に大きく、古墳に伴う遺構はもとより、墳丘本来の盛土、地山の整形等を確認することはできなかった。また、掘削部分とは別に両くびれ部に近い後円部斜面中段付近の墓地造成面から若干の埴輪片を採集している（第15図●印）。

#### a. 墳丘各部の概要

##### i) 後円部墳頂（第15図1、2）

後円部墳頂では中央部、北側縁辺部、南側縁辺部の十基程度の土葬墓を掘削した。現状では高さ3m程の土段状の高まりがあり、この高まりが古墳本来のものか、周囲を削られた結果であるのか

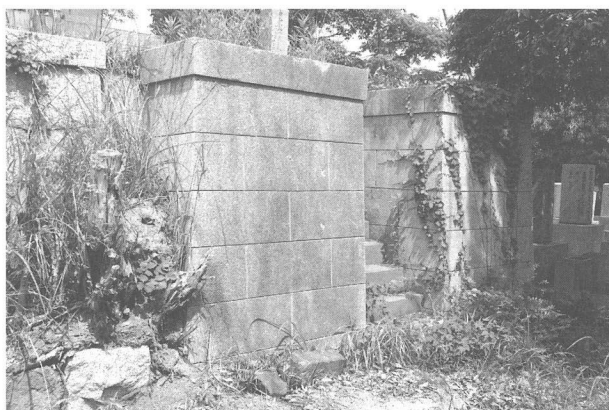


第15図 網浜茶臼山古墳墳丘と立会調査対象の改葬墓  
(宇垣1990文献第2図を改変)

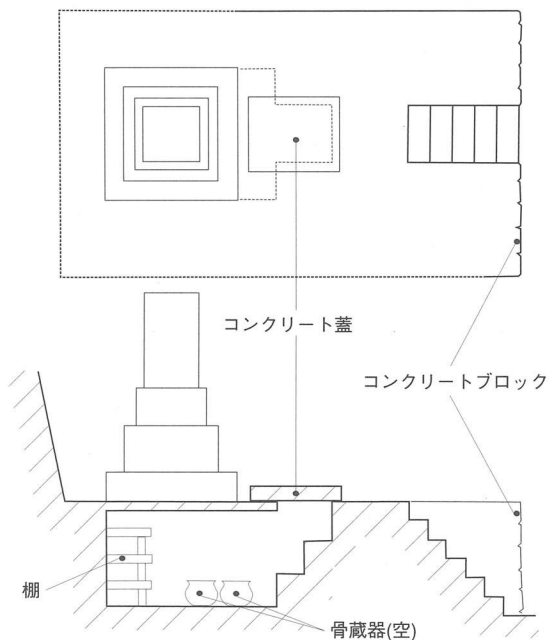
は不明だが比較的旧状を残しているようにも見える。中央部では深さ1.0~1.2m付近に石槨の壁体のものと思われる安山岩板石、壁体の裏込めなどと思われる河原石が多量に認められた。石槨は既にかなり破壊されているようで、これらの石材は混在状態にあり、近世墓の棺の囲いに転用されているものもあった。北側縁辺部、南側縁辺部では墓壙、墓地造成に伴う攪乱のみで古墳に関する遺構等は確認し得なかった。

ii) 後円部北側斜面 (4)

7基の土葬墓、火葬墓を掘削した。うち墳丘外側の2基では葺石のものと思われる花崗岩、流紋岩の角礫が多量に出土した。埴輪片2片が出土。



第16図 後円部東斜面近代墓外観



第17図 後円部東斜面近代墓模式図

iii) くびれ部上 (3)

3区画の墓地区画を掘削した。墓壙、墓地造成に伴う攪乱のみで古墳に関する遺構等は確認し得なかった。土葬墓内より埴輪片1片出土。

iv) 前方部墳頂 (5)

やや北よりの墓石下、表土に近いところで埴輪片多数出土。また、攪乱土中に葺石と思われる円礫~角礫を多く含む。前方部主体の存在する可能性も考え、掘削部分や出土する礫に注意を払ったが、石室石材と思われるもの、あるいは粘土などは認められなかった。

v) 前方部南斜面 (6)

埴輪片1片出土。またうち1基からは小振りな円礫が多数出土したが、周囲の他の埋葬からは出土せず、近世墓に伴うものの可能性が高い。

vi) 前方部外北斜面 (7)

墳丘に近い側では現地表から35cm程度、外側で現地表から80cm程度の深さで岩盤に達する。

b. 近世~現代墓

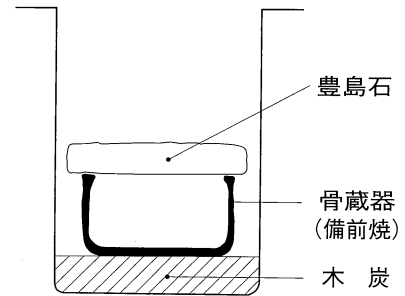
調査対象が古墳であり、近世~現代墓は改葬の対象であったため、調査時ほとんどその内容に注意を向けなかったが、その中で気付いた点を挙げておく。

後円部墳頂部分はほとんどが土葬墓であり、遺骨等は変色変質した土という状態以上

には残っていなかった。一部に木質の痕跡と思われる粘土の立ち上がりの認められるものがあり、桶などに入れられていたものと思われる。墓石の下に相当する部分しか掘削していないので不明だが、墓石の数以上に埋葬が重複して存在しているようであった。

後円部東斜面の区画入口に階段を設けた近代墓（8）は昭和初期のものである。コンクリートで納骨室を造っている。納骨室の中には奥に作り付けの棚を3段しつらえており、床には、既に改葬したためか空の骨蔵器2基がおいてあった（第17図）。

前方部墳頂部分は火葬墓が多く、墓石には寛政、天明、明和などの年号が見える。また、前方部南斜面（6）の火葬墓のうち1基は1.2m程の深さの墓壙に木炭を敷き、香川県豊島産の角礫質凝灰岩（豊島石）で蓋をした備前焼の浅い鉢状の骨蔵器を入れていた（第18図）。墓石には天保5年の年号、「・・童女」の戒名が記されていた。



第18図 前方部南斜面近世墓模式図

## 3 出土遺物

## 1) 出土埴輪

今回およそ30数点の埴輪片を得た。出土埴輪は特殊器台形埴輪、特殊壺形埴輪である。これらは表採および近世～現代の墓地による攪乱土層内からのもので、本来の位置を保つものやそれに近いものは存在しない。出土地点は後円部～くびれ部の墳丘斜面中段付近の墓地造成面（表採）、くびれ部上、後円部東斜面～北くびれ部、前方部墳頂、南くびれ部の墳丘内の各部分で、特に前方部墳頂のものは破片数、比較的大きな破片も多く、器面の状態も比較的良好なものが多い。

出土埴輪のうち主なものを第20図に図示した。小破片が大半で径を復元できるもの、タガ間を計測できるものなどはない。以下にその特徴を部位ごとに記す。特殊器台形埴輪の部位、文様各部の呼称は高井健司の呼称<sup>(1)</sup>に従うこととする。なお、破片個々の特徴は観察表にまとめることとする。

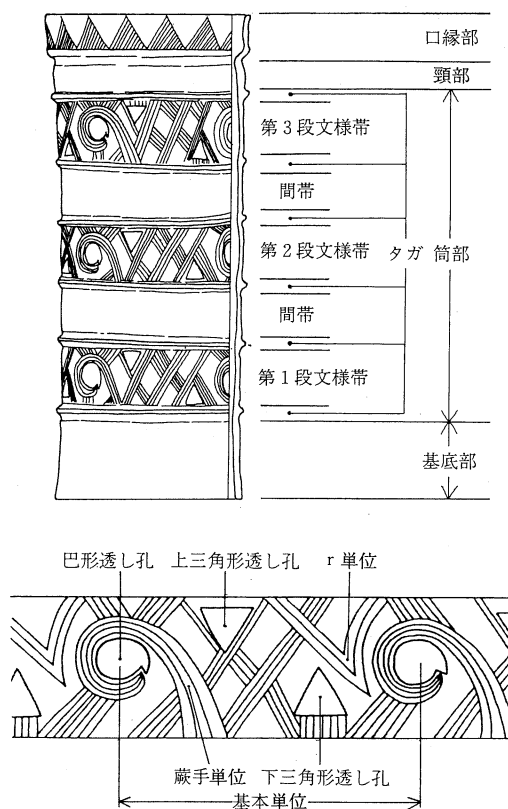
## a. 特殊器台形埴輪

## i) 口縁部・受部・頸部

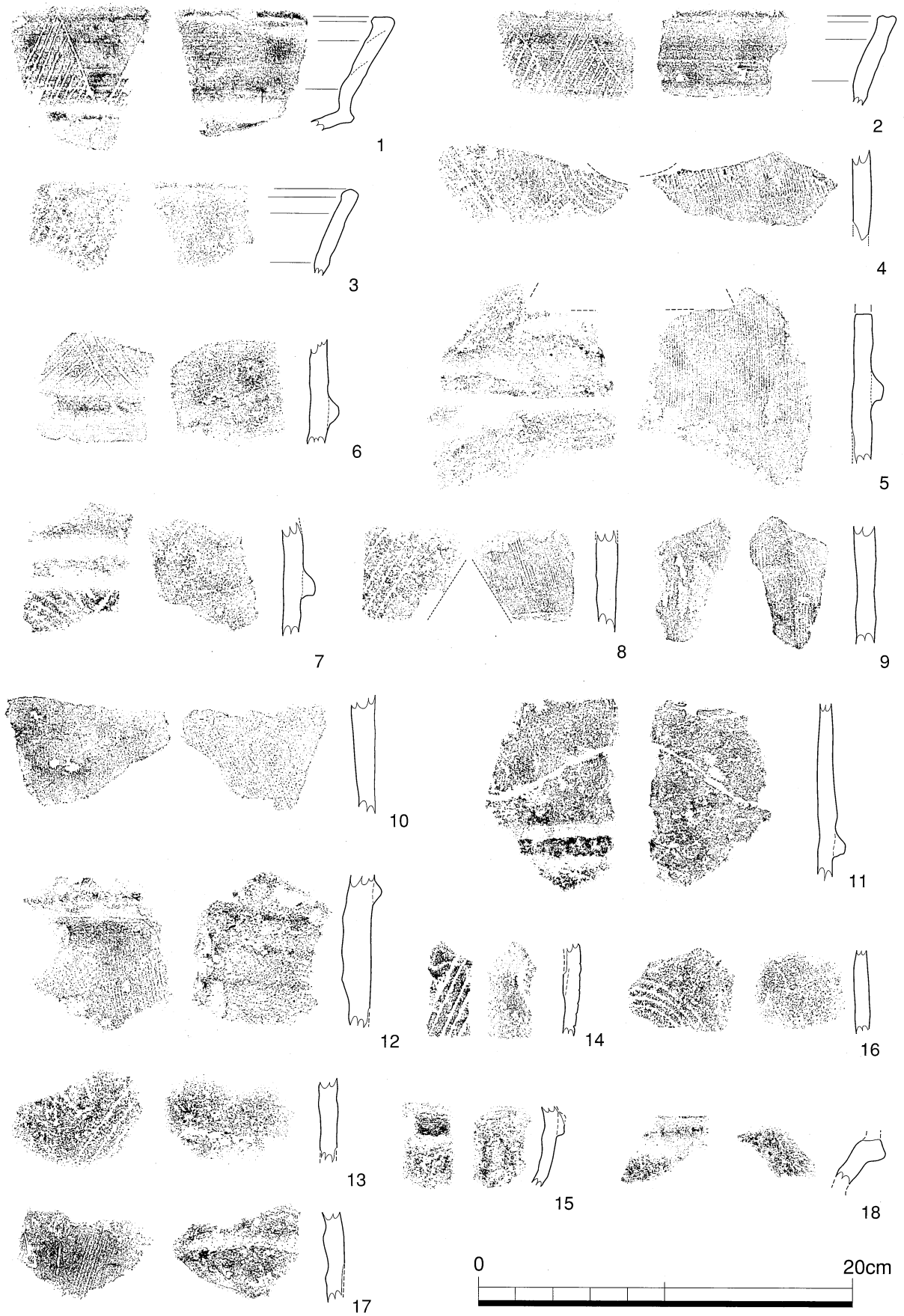
口縁部はわずかに外反しつつ、やや外向きに立ち上がる。口縁端部は強めのヨコナデにより面をとるもの（1、2）と丸く収めるもの（3）がある。外面には右上がりの鋸歯紋<sup>きよしもん</sup>を施す。内外面とも強い横方向のナデで成形されており、赤色顔料<sup>せきしよくがんにょう</sup>を塗布している。口縁部の幅は1の破片で約5.5cmを測る。17は口縁部下端<sup>けいぶ</sup>～頸部にあたる破片と思われるが、風化も激しく、小破片のため傾きや調整などはわからない。

## ii) 筒部

調整は外面が縦方向のハケメを主体とし、タガ周辺などは強いヨコナデ、文様帯ではハケメを残しつつ弱いナデが施されるようである。内面は横方向、特に左方向のヘラケズリを施すものと縦～斜め方向のハケメを残すものがあり、さらにハケメの上から間隔を空けて弱いナデを施すものがある。タガは断面台形のものが多い。外面には赤色顔料を塗布している。文様帯文様は全体の構成のわかるものはないが、<sup>ともえがた</sup>巴形透かし孔を取り巻く<sup>わらびてたんい</sup>蕨手単位と上下の三角形透かし孔の間の蕨手単位間をつなぐ単位からなる。蕨手単位は4条程度の沈線からなり、単位の付け根と渦紋部分の3方向に沈線群が取り付くものと思われる。三角形透かし孔間の単位はやはり4条程度の沈線からなる右上がり単位と三角形透かし孔の一辺に沿って右上がり単位に取り付く左上がりの単位からなる。破片のうち、7にはタガと接するようにやや弧を描く沈線5条が施されており、蕨手単位の一部か蕨手単位に取



第19図 埴輪各部と文様の呼称（註1文献より）



第20図 網浜茶臼山古墳出土埴輪 (1/3)

表2 網浜茶臼山古墳出土埴輪観察表

番号	器種	部位	出土地点	文様・調整の特徴	胎土	色調
1	特殊器台形埴輪	口縁部～受部	くびれ部～後円部 墳丘斜面中段付近	口縁部外面に右上がりの鋸歯紋を施す。調整は内外面とも横方向のナデで、赤色顔料を塗布する。	1mm以下の長石、石英、3mm程度の暗赤褐色粒を含む。	外面：10YR7/4(にぶい黄橙) 内面：10YR7/4(にぶい黄橙)
2	特殊器台形埴輪	口縁部	前方部墳頂北より	外面に右上がりの鋸歯紋を施す。調整は内外面とも横方向のナデ。赤色顔料が内面に残存。	1mm以下の長石、石英を含む。3～5mm程度の暗赤褐色粒をまばらに含む。	外面：10YR6/3(にぶい黄橙) 内面：10YR6/2(灰黄褐)
3	特殊器台形埴輪	口縁部	前方部墳頂北より	外面に右上がりの鋸歯紋を施す。風化のため調整等は観察できない。	1mm以下の長石、石英を含む。3～5mm程度の暗赤褐色粒をまばらに含む。	外面：7.5YR6/6(橙) 内面：7.5YR6/4(にぶい橙)
4	特殊器台形埴輪	筒部 (文様帯)	くびれ部～後円部 墳丘斜面中段付近	蕨手単位の一部とそれに取り付く右上がりの沈線群、右上がり単位に取り付く左上がりの沈線群を施す。巴形透かし孔、下三角形透かし孔の一部を含む。調整は、外面が縦方向のハケメの後ナデ、内面が斜め方向のハケメ。透かし孔の切り口はナデ。	1mm以下の長石、石英を含む。1～2mm大の暗赤褐色粒をまばらに含む。	外面：10YR7/4(にぶい黄橙) 内面：10YR7/4(にぶい黄橙)
5	特殊器台形埴輪	筒部 (文様帯～間帯)	前方部墳頂北より	右上がり単位の一部、下三角形透かし孔の一部が認められる。下三角形透かし孔の下にも左上がりの沈線と思われるものが認められるが、風化や傷のため文様の一部分か否かは不明。やや垂れ下がるようなタガをもつ。外面は風化等が激しく調整は観察できない。内面は斜め方向のハケメ、間帯裏面付近はナデが施される。	1mm以下の長石、石英を多く含む。3～5mm大の暗赤褐色粒を含む。	外面：7.5YR7/6(橙) ～7.5YR6/4(にぶい橙) 内面：10YR6/3(にぶい黄橙)
6	特殊器台形埴輪	筒部 (文様帯～間帯)	前方部墳頂北より	蕨手単位の基部部分とそれに取り付く右上がりの沈線群が施される。低く、丸みの強いタガをもつ。外面はナデで、文様帯にはナデ下に縦方向のハケメが観察できる。内面は左方向のヘラケズリが施される。外面に赤色顔料塗布。	1mm以下の長石、石英、2～5mm大の暗赤褐色粒を含む。	外面：8.75YR7/4(にぶい黄橙) 内面：10YR6/3(にぶい黄橙)
7	特殊器台形埴輪	筒部 (文様帯～間帯)	前方部墳頂北より	蕨手単位の一部とそれに取り付く右上がりの沈線群の一部が施される。断面形が方形に近いタガをもつ。外面の調整は風化等のため不明瞭だが、タガ周辺の横方向のナデと文様帯のタガの付け根付近に縦方向のハケメが観察できる。内面は左方向のヘラケズリと思われる。	1mm以下の長石、石英、1～2mm大の暗赤褐色粒をまばらに含む。	外面：7.5YR7/3(にぶい橙) 内面：10YR7/3(にぶい黄橙)
8	特殊器台形埴輪	筒部 (文様帯)	前方部墳頂北より	右上がり単位の一部と右上がり単位間の短沈線が施される。下?三角形透かし孔の一部があり、短沈線はこの透かし孔に取り付く。外面は風化等のため調整不明。内面は縦方向のハケメの後、間隔をあけて横方向のナデが施される。透かし孔の切り口はナデか。	1mm以下の長石、石英、1mm程度の暗赤褐色粒を含む。	外面：10YR6/3(にぶい黄橙) 内面：10YR7/4(にぶい黄橙)
9	特殊器台形埴輪	筒部 (間帯)	前方部墳頂北より	外面は縦方向のハケメの後ナデ(?)、内面は縦方向のハケメの後、一部に横方向のナデが施される。	1mm以下の長石、石英、2mm大の暗赤褐色粒をまばらに含む。	外面：10YR7/4(にぶい黄橙) 内面：10YR7/4(にぶい黄橙)
10	特殊器台形埴輪	筒部 (間帯)	くびれ部～後円部 墳丘斜面中段付近	外面は縦方向のハケメの後横方向のナデ、内面は斜め方向のハケメの後、横方向のナデが間隔をあけて施される。外面に赤色顔料残存。	1mm以下の長石、石英を含む。暗赤褐色粒含むが目立たない。	外面：10YR6/4(にぶい黄橙) 内面：10YR6/4(にぶい黄橙)
11	特殊器台形埴輪	筒部 (文様帯)	前方部墳頂北より	断面方形のタガをもち、タガに接するように右上がりの沈線が認められる。調整は外面がタガ周辺に横方向のナデが認められるほかは風化等のため観察できない。内面は左方向のヘラケズリ。	1mm以下の長石、石英を多く含む。2～5mm大の暗赤褐色粒をまばらに含む。	外面：10YR6/4(にぶい黄橙) ～7.5YR6/6(橙) 内面：10YR6/3(にぶい黄橙)
12	特殊器台形埴輪	筒部 (間帯)	前方部墳頂北より	断面三角形に近いタガをもち、タガ上端部に右上がり単位の基部と思われる沈線がわずかに認められる。調整は外面が縦方向のハケメ、タガ周辺が横方向のナデ、内面が横方向のヘラケズリと思われる。タガの下面付近にわずかに赤色顔料が残存。	1mm以下の長石、石英を多く含む。2mm程度の暗赤褐色粒を含む。	外面：10YR6/3(にぶい黄橙) 内面：10YR6/4(にぶい黄橙)
13	特殊器台形埴輪	筒部 (間帯～文様帯)	前方部南斜面	左上がりの沈線3～4条と右上がりの沈線3条が認められ、蕨手単位と右上がり単位の基部付近と考えられる。右上がり単位の右辺は割れ口か三角形透かし孔か判断し難い。調整は内外面とも風化等のため観察できない。	1mm以下の長石、石英を多く含む。1～2mm大の暗赤褐色粒を含む。	外面：7.5YR6/4(にぶい橙) ～7.5YR6/6(橙) 内面：8.75YR7/4(にぶい黄橙)
14	特殊器台形埴輪	筒部 (間帯～文様帯)	前方部南斜面	右上がり単位の一部と思われる沈線5条が施されている。調整は内面に縦方向のハケメが認められるが、風化等のため他は不明。	1mm以下の長石、石英を多く含む。2～5mm大の暗赤褐色粒を含む。	外面：8.75YR7/4(にぶい黄橙) 内面：7.5YR7/4(にぶい橙)
15	特殊壺形埴輪	胴部	前方部南斜面	低いタガをもつ破片。外面は風化が激しく調整等不明。内面はタガの裏面に横方向のナデ、その下方は粘土かき出し痕か。	1mm以下の長石、石英を含む。2～4mm大の暗赤褐色粒をまばらに含む。	外面：7.5YR6/6(橙) 内面：7.5YR7/4(にぶい橙)
16	特殊器台形埴輪	筒部 (文様帯)	北くびれ部～ 後円部斜面	蕨手単位の一部が認められる。風化が激しく内外面とも調整等は不明。	1mm以下の長石、石英を多く含む。2～7mm大の暗赤褐色粒をまばらに含む。	外面：5YR6/6(橙) ～7.5YR6/6(橙) 内面：7.5YR6/4(にぶい橙)
17	特殊器台形埴輪	筒部 (間帯)	くびれ部 ～後円部	外面は斜め方向のハケメ、内面は強いナデか、あるいはヘラケズリと思われる。	1mm以下の長石、石英を多く含む。暗赤褐色粒を含むが目立たない。	外面：8.75YR8/4(浅黄橙) 内面：8.75YR8/4(浅黄橙)
18	特殊器台形埴輪	受部?	くびれ部上	やや外側に拡がり、断面三角形の突帯状に張り出す。調整は内外面とも不明。	1mm以下の長石、石英を含む。3mm程度の暗赤褐色粒をまばらに含む。	外面：7.5YR7/3(にぶい橙) 内面：7.5YR7/4(にぶい橙)



り付く沈線群である可能性が高い。また、8は右上がり単位と下三角形透かし孔にぶつかる左上がり単位あるいは短沈線が施されている。

なお、今回の出土資料中には基底部の破片、またはそれに近いと判断できるものは存在しない。

b. 特殊壺形埴輪

特殊壺形埴輪と思われる破片は少なく、確実なものは15の破片1点のみである。これは胴部の破片であり、胴部中央部の突帯がある。内面調整に粘土掻き取り痕が認められる。

c. 胎土

特殊器台形埴輪、特殊壺形埴輪の胎土の特徴はほぼ共通しており、旭川流域の特殊器台形埴輪に特徴的な2～7mm程度の暗赤色～暗赤褐色の粒子を含むものである。色調は明黄褐色～橙褐色で、細かい長石、石英の粒子を多く含んでいる。



第21図 石槲石材 (1/3)

## 2) 石槨石材

後円部墳頂中央部からは石槨の壁体のものと思われる安山岩板石、壁体の裏込めなどと思われる河原石が多量に出土している。これらの石材は混在状態にあり、石槨の構造を示すもの、元の位置をとどめるものなどはなく、石槨は既にかなり破壊されているようである。石材は板状節理<sup>いたじょうせつり</sup>の見られる板状の角礫、亜角礫で、表面は灰白色(5Y8/1~5Y7/1)で、風化の及んでいない新しい割れ口では灰白色(N7/0)~明青灰色(5PB7/1)程度の色調を呈している。分析は行っていないが、宇垣匡雅の報告する「古銅輝石安山岩<sup>こどうきせきあんざいがん</sup>」と見られる<sup>(2)</sup>。また、石材には、宇垣の報告<sup>(3)</sup>では朱と見られる赤色顔料の付着するものもあるとされているが、酸化鉄の付着や、近世墓への転用やその影響と見られる変色は認められるが、赤色顔料などを残すものは発見できなかった。なお、安山岩板石数点をサンプルとして採集した(第21図)。

第21図1は現状で28cm四方程度のほぼ方形で、厚さは最大で4.5cmを測る。図向かって右側を大きく欠損しているほか、左側の両角を失っている。図上方の辺は横長の剥離が加えられ、形を整えているようである。図下方の辺では、特に目立った加工は認められないが、小口面の下端部に押圧剥離状の細かい剥離痕がみられる。

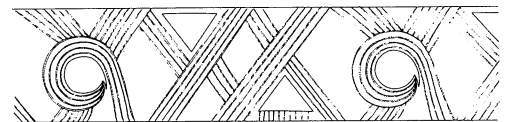
2は24.5×20.0cm程度の、ややいびつな方形の石材で、厚さは最大で3.5cmを測る。図上方の辺には剥離痕が認められるが、表面の摩滅が激しく石槨石材としての加工に伴うものではなさそうである。他の面にも特に加工等は認められない。

3は現状で長さ26.8cm、厚さ2.4~2.8cm程度の石材で、図上方、図向かって右側は新しい割れ口となっている。図下方の小口面には、剥離ではなく、鑿<sup>のみ</sup>などの工具によるものと見られる加工痕が認められる。

## 3) 小結

## a. 文様帯文様の復元

網浜茶臼山古墳の特殊器台形埴輪の文様帯文様に関しては宇垣匡雅により、第22図にあげる都月a類文様に近いものが復元されている<sup>(4)</sup>。今回の資料を加えてもなお、この復元に代わる文様帯文様の復元案を提示することは困難であるが、これまで報告されている資料も加え網浜茶臼山古墳の文様帯文様について若干検討してみたい。



第22図 網浜茶臼山古墳埴輪の文様の復元  
(註1文献より)

まず、上下の三角形透かし孔間の文様に注目すると、4~5条の沈線からなる右上がり単位、左上がり単位による文様であり、必ず右上がり単位が左上がり単位を切る関係にあることがわかる。また、第20図4の破片、宇垣論文<sup>(5)</sup>の図9-6の破片では4条の沈線からなる左上がり単位が、下三角形透かし孔の右辺、上三角形透かし孔の左辺に沿って施されていることもわかる。こうした特徴をもつ文様をあげると、右上がり単位が1単位の権現山51号a類文様<sup>(6)</sup>、右上がり単位が2~3単位の都月a類文様<sup>(7)</sup>などが挙げられる。網浜茶臼山例では右上がり単位が2単位以上存在することを示す破片は見られず、宇垣もまた「二つの三角形透かし孔の間をすべて右上がり平行沈線で充填する文様」の存在を指摘している。また第20図8は下三角形透かし孔に左上がり単位あるいは短沈線がぶつかっており、やはり都月b類文様<sup>(8)</sup>や浦間茶臼山例<sup>(9)</sup>に同様の文様がある。いまだ資料不足の感は否めないが、右上がり単位が2単位以上存在することを示す破片が見られないことや、三角形透かし孔間を右上がり沈線で充填する文様の存在、下三角形透かし孔に左上がり単位

がぶつかるものの存在を考えると、権現山51号墳 a 類類似文様、浦間茶白山例類似文様である可能性が高いように思われる。

#### b. 調整等の特徴

今回の資料で観察できる調整技法は、外面では縦方向のハケメ、内面では縦～斜め方向のハケメ、横方向のヘラケズリが認められる。特殊器台、特殊器台形埴輪の内面調整は、基本的に縦方向のハケメの後にヘラケズリを施すものである。権現山51号墳例ではハケメの後に内面のほぼ全面を上部では左方向、上方向、下部では下方向、右方向のヘラケズリが施されており、完形に近い状態の埴輪を上部では上から、下部では倒立させて下からヘラケズリを施していると思われる。一方、七つ塊1号墳例、都月坂1号墳例ではヘラケズリは埴輪下部にのみ縦方向に施され、内面の中程から上部にかけ縦方向のハケメを残している。今回の資料を見ると、縦方向のヘラケズリを施すものが認められない。また、ヘラケズリの向きまで観察できるものは、左方向のものとみられる。これは埴輪を倒立させながらほぼ全面にヘラケズリを施す権現山51号墳例に近い特徴ととらえられ、かつ、今回の資料が埴輪上部の破片にかたよっているためと思われる。

一方、胎土に含まれる暗赤色粒子は、花崗岩質の岩石ないし風化土壤に由来する水酸化鉄<sup>すいさんかてつ</sup>を主成分とするものとされる<sup>(10)</sup>。この暗赤色粒子を含む胎土からなる特殊器台形埴輪は都月坂1号墳、七つ塊1号墳、操山109号墳、網浜茶白山古墳、宍甘山王山古墳<sup>しじかいさんのうやま</sup>の旭川下流域の資料に限られており、他地域の特殊器台形埴輪はもとより、特殊器台形土器、円筒埴輪、同時期の土器類にも含まれるものはないという。これら以外では唯一、岡山市矢藤治山弥生墳丘墓<sup>やとうじやま</sup>の特殊器台形土器に含まれることが報告されている<sup>(11)</sup>。

#### 註

- (1) 高井健司 1987 「2. 埴輪」『七つ塊古墳群』七つ塊古墳群発掘調査団
- (2) 宇垣匡雅 1987 「堅穴式石室の研究－使用石材の分析を中心に－（上）」『考古学研究』第34巻第1号
- (3) 宇垣匡雅 1990 「網浜茶白山古墳・操山109号墳の測量調査－吉備の前期古墳Ⅲ－」『古代吉備』第12集
- (4) 宇垣匡雅 1984 「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』第31巻第3号。図10
- (5) 註（4）文献
- (6) 安川 満 1991 「埴輪」『権現山51号墳』権現山51号墳刊行会
- (7) 近藤義郎・春成秀爾 1967 「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号
- (8) 註（7）文献  
高井健司 1987 「1号墳出土埴輪と都月b類」『七つ塊古墳群』七つ塊古墳群発掘調査団
- (9) 註（4）文献。図5-23
- (10) 註（4）文献
- (11) 安川 満 1995 「矢藤治山弥生墳丘墓出土特殊器台・特殊壺の特徴とその評価」『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団

## 第Ⅳ章 まとめ

### 1 網浜茶臼山古墳出土埴輪の位置付け

網浜茶臼山古墳の位置付けに関して宇垣匡雅は都月 b 類→都月 a 類という変化と特殊壺形埴輪→壺形埴輪という変化を踏まえ旭川流域の特殊器台形埴輪出土古墳を、操山109号墳・七つ塚1号墳→網浜茶臼山古墳→都月坂1号墳→宍甘山王山古墳、と編年している<sup>(1)</sup>。第Ⅲ章で報告した網浜茶臼山古墳出土の特殊器台形埴輪の特徴をまとめると次の2点が注意される。

第1点は文様帯文様は都月 a 類類似の文様が復元されてきたが、権現山51号墳 a 類や浦間茶臼山古墳例類似の右上がり単位が1本の文様の可能性があることである。

第2点は内面調整に横方向のヘラケズリが存在し、ヘラケズリを比較的多用するものである可能性があることである。わずかな内容ではあるが、こうした特徴をふまえ、網浜茶臼山古墳出土埴輪の位置付けを見直してみたい。

#### a. 特殊器台形埴輪の編年

特殊器台形埴輪の編年に関しては複数の見解があり、特に奈良<sup>はしはか</sup>県箸墓古墳例・兵庫県権現山51号墳例のような三角形透かし孔間が狭く右上がり単位が1本のものと都月 a 類・都月 b 類文様との関係の解釈で大きく異なっている。高井健司は文様帯文様を「三角形透し孔の間が比較的広く、そこに複数の左・右上がり単位が描かれる」Ⅰ群と「(三角形透し孔の)間が狭く、1、2の右上がり単位や蕨手単位を中心に広がる条線で埋められる」Ⅱ群とに大別し、Ⅰ群に関しては宮山型→都月 b 類→都月 a 類→元稲荷類、Ⅱ群に関しては(宮山型)→箸墓 a 類→権現山51号墳 b 類という序列を想定している<sup>(2)</sup>。高井はⅠ・Ⅱ群相互の関係を明言していないが、両者を系譜の異なる併行する群ととらえているとみらる。

一方、古市秀治は文様帯文様に限れば、三角形透かし孔の間に描かれる右上がり単位が少ないものから多いものへの変化を想定し、高井がグループとしてとらえたⅠ群・Ⅱ群を時間的差異の中に解消してとらえる<sup>(3)</sup>。

高井の指摘するⅠ群、Ⅱ群の2グループは文様の違いからも、系譜の異なるものとして把握することができる。しかしⅡ群は、宮山型特殊器台からの文様の変化が無理なく説明できるⅠ群と異なり、宮山型からの変化を想定することは難しい。Ⅱ群の文様には右上がり単位の中に短沈線を充填するものなど向木見<sup>むこうきみ</sup>型特殊器台文様に類似するものがあり、向木見型特殊器台の文様からの系譜を想定するほうが自然と思われる。特に、矢藤治山弥生墳丘墓の特殊器台が判明した<sup>(4)</sup>ことで、少なくとも宮山型併行段階まで向木見型系の特殊器台文様が存在することは確実であり、宮山型特殊器台文様自体、向木見型特殊器台文様の唯一の後継者ではない可能性がでてきたといえる。Ⅱ群に属する特殊器台形埴輪をもつ箸墓古墳、奈良<sup>にしとのづか</sup>県西殿塚古墳では宮山型特殊器台、宮山型に類似する文様が共伴することから<sup>(5)</sup>も、Ⅱ群が宮山型とは別の系譜であることは認め得ると考えられる。また、内面調整などでは、都月坂1号墳例、七つ塚1号墳例などⅠ群に属するものが埴輪下部にのみ縦方向のヘラケズリを施すのに対し、箸墓古墳例、権現山51号墳例などⅡ群に属するものでは内面のほとんどにヘラケズリを施しており、特殊器台の内面調整に近い特徴と考えられる。それ以外にも基底部外面の調整、特殊壺型埴輪の形態など、それらを省略したり、頸部が逆ハ字に開く特殊

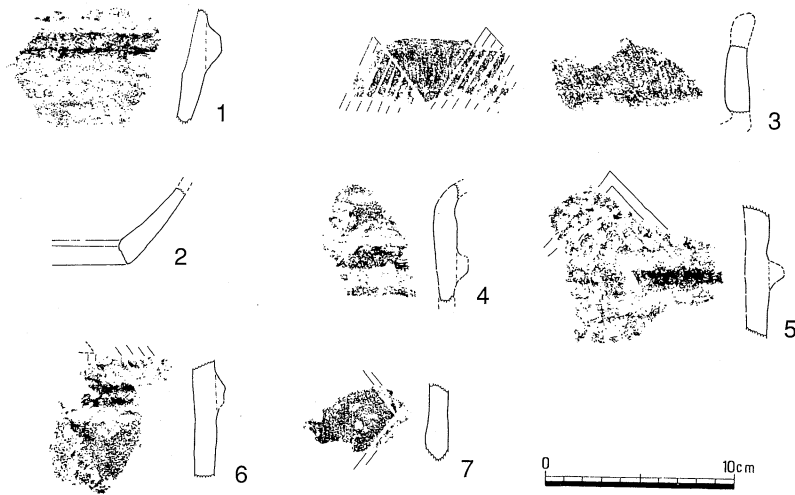
壺形埴輪、壺形埴輪を伴うI群より古い特徴を備えていると見ることができる。したがって、I群の出現がII群にやや遅れる可能性を考えたい。このように考えることで、内面調整のヘラケズリを多用するものから省略するものへという変化、基底部外面の調整のヘラケズリ→ナデ→省略という変化、特殊壺形埴輪の形態の変化なども矛盾なく説明することができると思う。

以上の理解から網浜茶臼山古墳の特殊器台形埴輪をみると、ヘラケズリを多用する内面調整からも都月a類文様ではなく高井II群に近い文様を想定し得る。したがって、都月b類文様を主体とし、内面も縦方向のハケメのみである七つ塚1号墳などより古く位置付けられる可能性が高い。

b. 網浜茶臼山古墳と操山

109号墳

次に操山109号墳の埴輪について見てみよう。操山109号墳出土埴輪は宇垣論文図8に挙げられた7片の埴輪が知られている<sup>(6)</sup>。このうち操山109号墳を古く位置付ける根拠となっているのは5の破片に見られる逆V字形の文様



第23図 操山109号墳出土埴輪 (註(1)文献より)

と思われる。宇垣はこれを都月a類文様以外の文様ととらえ、網浜茶臼山古墳例より古くとらえるが、類似の文様は都月a類より新しく位置付けられる京都府元稲荷古墳例にも認められ古く位置付ける根拠にはなりがたい。また口縁部とされる3の破片は調整が内外面ともタテハケであり、口縁部とは考えにくい。筒部にこうした鋸歯紋もといなりが施される例は知られていないが、権現山51号墳例にみられる頸部文様と思われる。いずれにしても文様帯文様を復元することは困難であり、その位置付けも保留するほかない。

網浜茶臼山古墳と操山109号墳の先後関係に関するもう一つの根拠は、両墳の位置関係である。宇垣は両古墳の主軸線が網浜茶臼山古墳後円部中心点において74°で交差することを指摘し、操山109号墳の主軸線上に網浜茶臼山古墳が築かれた可能性を考える。しかし、網浜茶臼山古墳が丘陵の頂部に後円部を置くように築かれ、そこから派生する尾根上に操山109号墳が築かれていることを考えると、地形的要因以上の意図的なものを直ちに首肯することはできない。以上から、埴輪を含め実態が未だ不明瞭であるためその先後関係を論じることは困難である。しかし、操山109号墳が網浜茶臼山古墳に先行すると考える積極的な根拠はないと言える。

c. 網浜茶臼山古墳の位置づけ

安川満は浦間茶臼山古墳の評価のなかで、高井II群や浦間茶臼山古墳例などを畿内及び畿内周辺グループ、高井I群を旭川流域地域グループとして、その広がり背景にある地域間関係が異なることを論じている<sup>(7)</sup>。その中で安川は、畿内及び畿内周辺グループに属する特殊器台形埴輪を浦間茶臼山古墳との関係のなかで評価している。ここまでに、網浜茶臼山古墳の特殊器台形埴輪が浦間茶臼山古墳例や権現山51号墳例に対比できる、高井II群、畿内及び畿内周辺グループに属するものである可能性があることを指摘してきた。このこと、すなわち胎土に暗赤色粒子を含む強い共通

性を持つ旭川下流域の特殊器台形埴輪に両者が存在することになることから、文様帯文様における畿内及び畿内周辺グループと旭川流域地域グループの差が、制作集団の差ではなく基本的には時間的な差である可能性が高いことが指摘できる。これにより、同じく暗赤色粒子を胎土に含む矢藤治山弥生墳丘墓出土の特殊器台が向木見型の文様をもつことも矛盾なく説明することができる。一方で、畿内及び畿内周辺グループを浦間茶臼山古墳との関係のなかで評価した部分については修正しなければならない。特に、箸墓古墳、西殿塚古墳には特殊器台形埴輪とともに、畿内以外では総社市宮山弥生墳丘墓<sup>(8)</sup>しか出土例のない宮山型特殊器台が伴っていることから、畿内における特殊器台形埴輪の出土例は一埴輪祭祀自体が特殊器台祭祀を起源とするものであることを否定するものではないが一急速な円筒埴輪化のなかで吉備、特に備前地域の首長との関係を表象するものにすぎないのかもしれない。逆にいえば、吉備以外の出土例が近江、山城、摂津、播磨の各1例で大和に出土例のない旭川流域地域グループ（高井Ⅰ群）に対し、吉備・大和以外は播磨・権現山51号墳例のみである畿内及び畿内周辺グループ（高井Ⅱ群）は大和との関係を強く感じさせるものともいえる。網浜茶臼山古墳は全長92m、箸墓古墳の1/3相似形と言われ、浦間茶臼山古墳に次ぐ規模をもつものであることもそうした評価に遜色ないものといえる。

旭川下流域平野周辺では弥生時代、特殊器台がほとんどないという状況から突如として特殊器台形埴輪を伴う前方後円（方）墳が次々と築かれる。網浜茶臼山古墳、操山109号墳、七つ塚1号墳、都月坂1号墳がそれであり、特殊器台形埴輪の特徴を残す円筒埴輪をもつ穴山山王山古墳も存在する。また、埴輪等を伴っていないが、備前車塚古墳、片山古墳、津倉古墳らもⅠ期に位置付けられる可能性がたかい。弥生時代末、楯築弥生墳丘墓を生み出し、吉備の中枢として君臨した備中南部・足守川流域平野に特殊器台形埴輪を伴う前方後円墳が倉敷市矢部大塚古墳1基のみであることをみるとこの状況は異常とも言える。そこには当然、旭川下流域平野の諸首長の政治的、経済的権力や、吉備内部の政治的関係ばかりでなく、畿内中枢地域との政治的関係が大きく係わっていることは、箸墓古墳や西殿塚古墳に特殊器台形埴輪が存在することからもうかがえる。弥生時代末の備中南部の首長を頂点とする部族連合内での政治的闘争のなかで、畿内中枢と、吉備内の首長としての地位を求め小集団首長との間の新たな「同盟」関係がこれらの古墳の背景にあることが想像される。したがって、特殊器台形埴輪はそれを共有する畿内首長との「擬制的同祖同族関係」<sup>(9)</sup>の象徴であったと同時に、特殊器台を埋葬祭祀の道具のなかで最上位におく吉備内部においては吉備内の首長の地位を保証するものであったと考えられる。

その中で突出した規模をもつ前方後円墳、網浜茶臼山古墳は旭川下流域平野の盟主的存在であったものと思われる。また、旭川下流域における1～2期の古墳の乱立状況は、それらの古墳に弥生時代以来系列的に墳墓が築造されるものがあることや、きわめて短い期間に多くの古墳が築造されており単系的な系譜関係が想定し難いことから、吉備あるいは備前、旭川下流域全体などといった広い範囲を統括する首長といった形ではなく、それぞれの小地域集団が造墓主体となっていることが予想される。これは、この畿内との関係が畿内部族同盟－備前部族同盟という関係ではなく、浦間茶臼山古墳や網浜茶臼山古墳の被葬者のような盟主的存在の介在があるにしても畿内有力首長－旭川下流域のそれぞれ小集団首長の関係であることを示しているものと思われる。

網浜茶臼山古墳出土埴輪からその評価を中心に、旭川下流域の1～2期の古墳の展開を考えてみた。もとより、網浜茶臼山古墳も操山109号墳も資料不足の感は否めずこの編年的位置付けに関しては流動的なものにならざるを得ない。文様帯文様においても、網浜茶臼山例がこれまでの復元案のとおり都月a類文様であれば、旭川下流域には都月b類、都月a類文様しか存在しないこととなり、この評価も大きく変更せざるを得ない。とはいえ、網浜茶臼山古墳、操山109号墳をはじめとする操山山塊南西部の首長墳は一貫して前方後円墳という墳形、地域内での最大規模を保ち続ける

ことが注目される。特に1～2期において周辺の古墳との格差は大きく、事実上、西岸平野を含むより広い範囲の盟主的存在であったものと思われる。両古墳とも墓地という現状であり、今後の調査等も望み難いが、旭川下流域最古かつ最大の古墳として保存の道が望まれる古墳である。

---

 註

- (1) 宇垣匡雅 1984「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』第31巻第3号  
 宇垣匡雅 1990「網浜茶臼山古墳・操山109号墳の測量調査1 - 吉備の前期古墳Ⅲ -」『古代吉備』第12集 古代吉備研究会
- (2) 高井健司 1992「特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪」近藤義郎編『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社
- (3) 古市秀治 1996「特殊器台形埴輪の研究 - 岡山県南部出土の資料を中心に -」『考古学研究』第43巻第1号
- (4) 近藤義郎・井上智博編 1995『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団
- (5) 丸山竜平 1993「倭迹迹日百襲姫命墓」『「天皇陵」総覧』歴史読本特別増刊  
 近藤義郎 1995「大和の最古型式前方後円墳と宮山型特殊器台」『みずほ』16  
 福尾正彦 1991「衾田陵の墳丘調査」『書陵部紀要』第42号
- (6) 註（1）文献
- (7) 安川 満 1991「特殊器台形埴輪の地域的動向」近藤義郎編『権現山51号墳』『権現山51号墳』刊行会
- (8) 高橋 護・鎌木義昌・近藤義郎 1987「宮山墳墓群」『総社市史』考古資料編
- (9) 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店

## 2 神宮寺山古墳墳端部の構造について

昭和58年の確認調査では、神宮寺山古墳の墳端部を検出し、現状の墳丘－史跡指定範囲の外に墳丘外表施設が埋没していることが明らかとなった。しかしながら、もとより限られた範囲の調査であると同時に、湧水や軟弱な地盤のため発掘区の壁が崩落するなどの悪条件もあり、十分な調査や検討ができなかったことも事実である。ここでは、検出状況などから神宮寺山古墳墳端部の構造を再検討してみたい。

### a. 検出状況の再検討

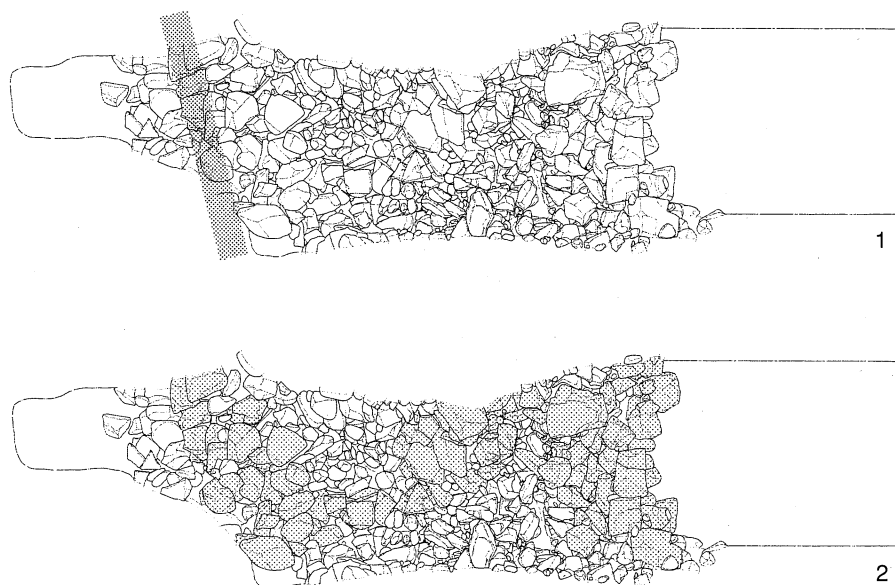
確認調査で検出された墳丘外表施設は、幅1mあまり、長さ3m足らずの範囲にすぎず、ここからその構造や構築技法などに言及することは困難といえる。しかしながら、調査時に悪条件下で観察された所見にはいくつか疑問点もある。当時の観察による記録に基づきつつ、一点ずつ検討していくこととする。

#### i) 墳端列石

試掘坑Iでは墳丘端を確認しており、外方側に面を意識して2～3段積んでいたという。土層断面図では2段の角礫ないし垂角礫がほぼ垂直に積まれている様子がわかる。しかし、平面図では、墳端列石より外の石材や試掘坑の壁にかかる上層の石材も同様に表現されており、どの石材が墳端列石を構成するか判然としない。断面図の墳端列石の位置やや大振りな角礫、垂角礫の分布から墳端列石線を想定したものが第24図1である。この線は磁北線より西に約12°傾いているが、神宮寺山古墳の墳丘主軸がN78°E程度と見られるため、ほぼこれに直交するものと見られる。

#### ii) 墳端列石外の石材

報告では墳端列石より外側、Ⅲ-6層、Ⅴ-4層で確認される礫は、「葺石の落石と思われる」とされている。その多くは、湧水のため検土杖や手探り状態で確認されたものである。平面図では墳端列石と見られる石材が、その外側の石材の上に乗っていることが判別でき、これらの石材が葺石の



第24図 試掘坑I 墳端列石(上)と大型石材の分布(下) (1/40)



落石ばかりではないことが推定される。金蔵山古墳においても平成12年の調査<sup>(1)</sup>で墳端の埴輪列の外に小角礫による石敷面が設けられていることが判明しており、こうした施設が墳端列石の外に設けられていた可能性が高いものと思われる。

### iii) 葺石の構築方法

報告では「石積みの単位等を認めることはできなかったが、敢えて指摘するならば、角礫がおおよそ2m間隔で据えられ、その間を小礫で充填しているようにも観察された。」と指摘されており、墳端列石周辺と検出された葺石のうち東端部付近の石材の状況を指している。検出された葺石のうち平面図から読み取れるやや大振りな角礫、亜角礫を示したのが第24図2である。これを見ると、上記の墳端列石周辺及び東端部付近とともにそれに直行する方向に大振りな角礫、亜角礫が並ぶ傾向があるように見える。検出範囲がきわめて狭いため明言はできないが、兵庫県・五色塚古墳<sup>ごしきづかこふん</sup>で指摘されている区画石列に類するものである可能性がある。また、東端部付近の石材は、大振りな角礫、亜角礫が厚く積まれており、通常の葺石とは異なる構造物である可能性がある。これについては次に検討する。

### iv) 葺石東端部付近の石材

検出された葺石の東端部付近は、大振りな角礫、亜角礫が厚く積まれており、通常の葺石とは異なる構造物である可能性がある。報告ではこの石材より東側の土層について、IV-1層は盛土の可能性のある土層、IV-2層以下は盛土であるとされており、そうであればこれらの石材は、墳丘完成時には外表に露出しない石材ということとなる。平成12年の金蔵山古墳の調査では、溝状の掘り込み内に設置した大型の石材を基部として葺石が置かれ、さらに埴輪の設置後、上層葺石が厚く葺かれている状況が確認されている。神宮寺山古墳では検出された葺石を断ち割っていないためわからないが、同様の葺石の基部となる構造の可能性はある。

### v) 墳丘側の葺石と盛土

墳丘側の葺石については、掘削を開始した直後、表土・造成土層下から円礫及び角礫が密集して検出されたが、一部の葺石をバックホーで掘削してしまったため十分に観察できなかったとされている。しかし、検出された葺石が、このまま墳丘側に続くのであれば、土層断面で十分に観察できるものと思われる。この点を報告では「大部分は円礫を葺いただけの可能性はある」と解釈しているが、断面図や写真を見るかぎりそれを窺わせる石材の分布や土層の差は認められない。従って、検出された葺石がそのまま墳丘側に続いていく可能性は低いものと思われる。このことは、断面図IV-1層の存在、先に述べた東端部付近の石材の状況からも窺われる。そもそも検出された葺石面はおおよそ20°ほどの傾斜しかなく、古墳墳丘の斜面としては緩やかな印象は否めない。金蔵山古墳の状況を参考にするならば、東端部付近の石材を基部とする葺石がIV-1層の西側の面に葺かれていた可能性が高いものと思われる。

## b. 神宮寺山古墳墳端部構造の復元

これまで可能性として指摘した事項をまとめると

- 1 神宮寺山古墳の墳丘主軸にはほぼ直行する施設であり、前方部前端の墳端列石にあたる。
- 2 墳端列石の外側に敷石を伴う。
- 3 検出された葺石の東端部付近で、検出された大振りな石材群を基部として、傾斜を変えて葺石が設置される。

ということになる。以上から検出された施設を想定すると、前方部前端部にとりつく幅2 mほど、高さ0.6~1.2mほどの段築状の施設である。なお、葺石面を断ち割っていないため想像にすぎないが、墳端列石外の敷石の上に墳端列石がのっていることから、かなりの厚さで礫を積み重ね低湿地側の葺石や盛土の基礎としている可能性もある。兵庫県・五色塚古墳でも周溝内の傾斜が大きく変わる部分に「最下段」を設けていることが知られているが、同様に、神宮寺山古墳の低湿地側に設けられた「最下段」である可能性を指摘しておきたい。

---

註

- (1) 宇垣匡雅・乗岡実2000「金蔵山古墳」『岡山市埋蔵文化財センター年報1』岡山市教育委員会



神宮寺山古墳全景



調査地点の現況  
(平成18年現在)



試掘調査の状況(全景)

図版 2



上左 試掘坑 I 試掘調査の状況

上右 試掘坑 I 葺石検出状況 (西側から)

下 試掘坑 I 葺石検出状況 (東側から)



試掘坑 I  
墳端部の状況

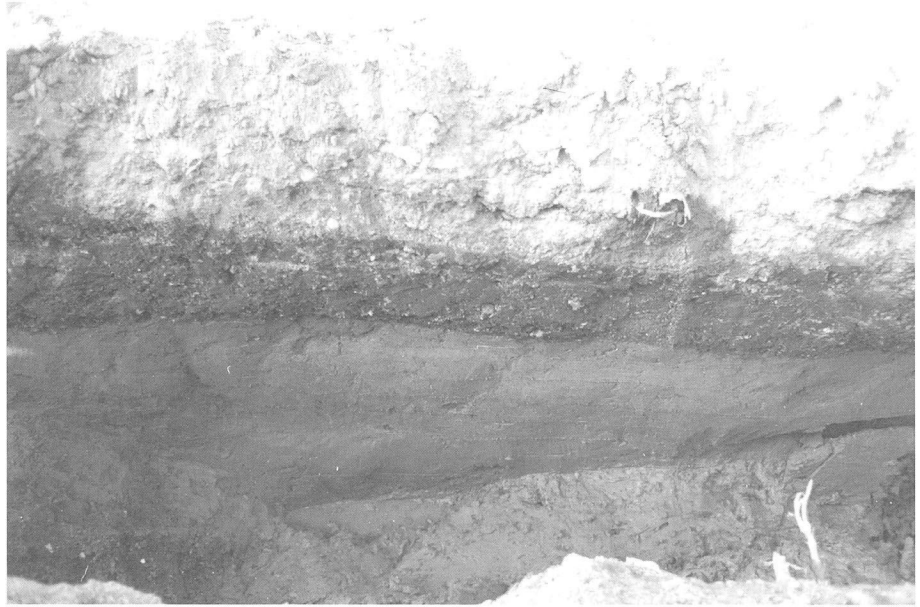


試掘坑 I  
墳丘側盛土の状況



試掘坑 II  
西端部の土層堆積状況

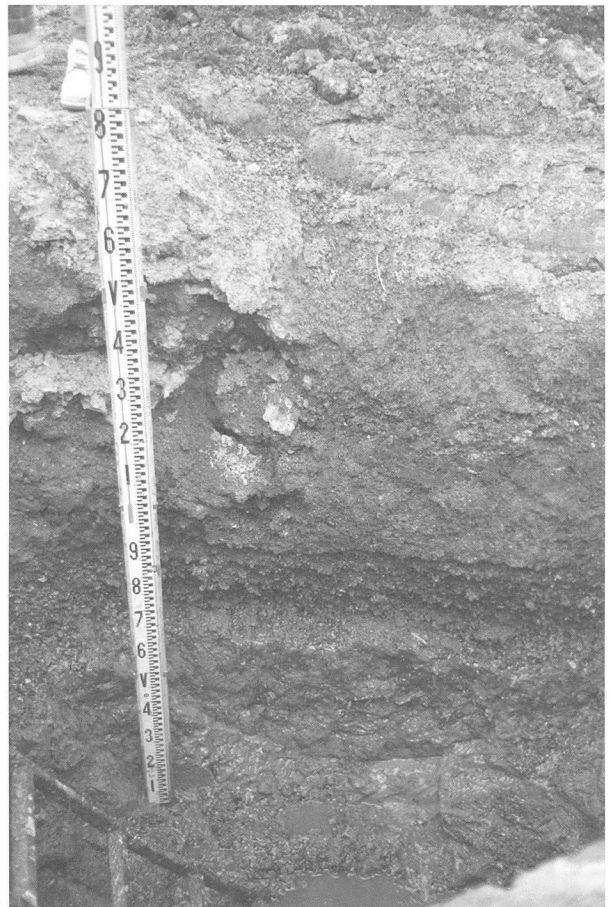
図版 4



試掘坑Ⅱ  
東端部の土層堆積状況



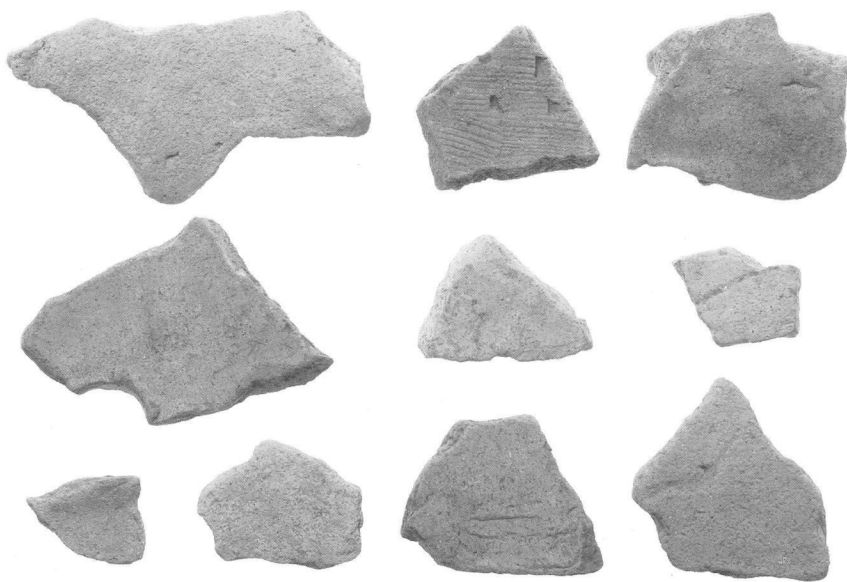
試掘坑Ⅲ  
土層堆積状況



試掘坑Ⅳ  
土層堆積状況



神宮寺山古墳出土埴輪(外面)



神宮寺山古墳出土埴輪(内面)

図版 6

網浜茶臼山古墳全景  
(南東側から)



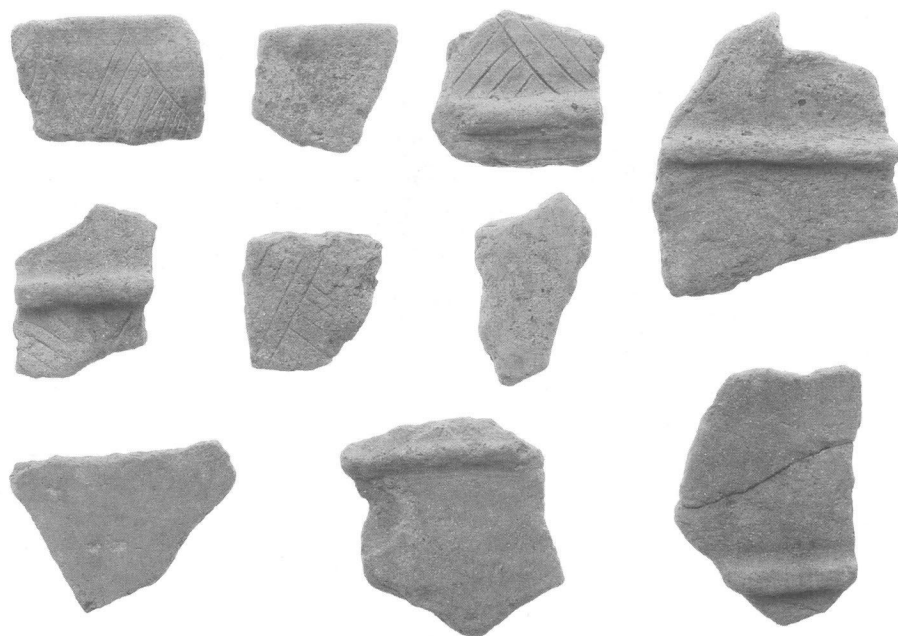
改葬事業実施状況  
(前方部墳頂)



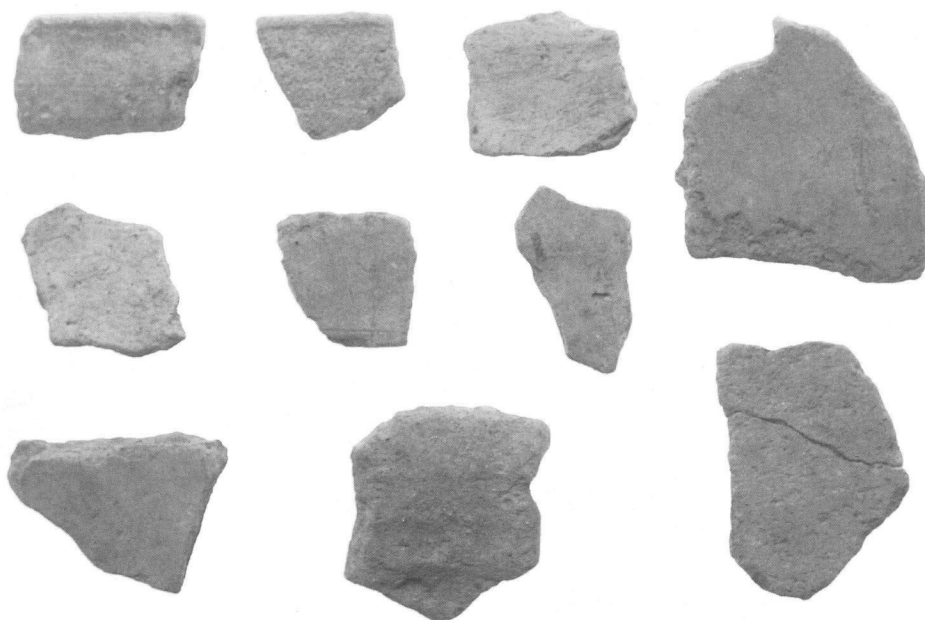
石槨石材の検出状況  
(後円部墳頂)







網浜茶臼山古墳出土埴輪(前方部墳頂出土・外面)

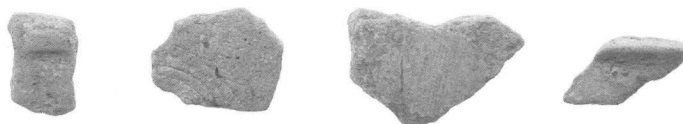


網浜茶臼山古墳出土埴輪(前方部墳頂出土・内面)

図版 8



網浜茶臼山古墳出土埴輪  
(くびれ部等出土・外面)



網浜茶臼山古墳出土埴輪  
(くびれ部等出土・内面)



網浜茶臼山古墳石槨石材

# 報告書抄録

ふりがな	じんぐうじやまこふん あみのはまちゃうすやまこふん							
書名	神宮寺山古墳 網浜茶白山古墳							
副書名								
編著者名	神谷正義・安川 満							
編集発行機関	岡山市教育委員会							
所在地	〒700-8544 岡山市大供1丁目1番1号							
発行年月日	平成19年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
じんぐうじやまこふん 神宮寺山古墳	おかやましなかいちよういっちようめ 岡山市中井町1丁目	33201		34° 41' 1"	133° 55' 50"	19831022 ～ 19831105	約 30 m <sup>2</sup>	汚水処 理槽等 新設
あみのはまちゃうすやまこふん 網浜茶白山古墳	おかやましあかさかみなみしんまち 岡山市赤坂南新町	33201		34° 38' 38"	133° 56' 21"	19940302 ～ 19940311	-	無縁墓 改葬
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
神宮寺山古墳	古墳	古墳時代	葺石	円筒埴輪ほか		国指定史跡神宮寺山古墳隣接地の確認調査。 前方部前端部の墳丘外表施設を確認。		
網浜茶白山古墳	古墳	古墳時代	なし	特殊器台形埴輪、特殊壺形埴輪		墳長92mの出現期前方後円墳の立会調査。 特殊器台形埴輪等を採集。		

神宮寺山古墳  
網浜茶臼山古墳

平成19年 3月31日

編 集 岡山市教育委員会文化財課  
岡山市埋蔵文化財センター  
〒700-8284 岡山市網浜834-1 TEL 086-270-5066  
発 行 岡山市教育委員会  
〒700-8544 岡山市大供1丁目1-1 TEL 086-803-1000(代)  
印 刷 昭和印刷株式会社  
〒700-0942 岡山市豊成3丁目1-27 TEL 086-264-6110